

平城宮跡発掘調査部

発掘調査概報

1994年度

● 奈良国立文化財研究所 ●

〒630

奈良市二条町二丁目九一
TEL: 0742-34-3931

1994年度平城宮跡発掘調査部発掘調査機報 正誤表			
頁	行	誤	正
6	6	掘込み地形	掘込み地蔵
	32	心々野距離	心々の距離
23	7・8	土抗	土坑
24	表3	館野和巳	館野和己
24	表3	1994	1995
(248-14~16)			
25	14	No. 1	No. 4
	図23	固濠埋土	周濠埋土
40	28	中心線がか	中心線が
47	5	直行して	直交して
54	32	巣り神	巣り神
63	18	白杵	臼杵
卷末	表5	ヒット2	ピット2

1994年度
平城宮跡発掘調査部
発掘調査概報

奈良国立文化財研究所
1995年

目 次

I	平城宮の調査	3
1	右馬寮の調査	4
2	内裏北外郭北方の調査	14
3	式部省東官衙の調査	15
4	小子門および東一坊大路の調査	18
5	北面大垣の調査	23
II	平城京・京内寺院等の調査	24
1	市庭古墳前方部・周濠の調査	25
2	左京一条一坊十四坪の調査	26
3	左京七条一坊十坪・十六坪の調査	28
4	左京六条・東一坊大路の調査	55
5	左京一条二坊十坪の調査	56
6	左京一条二坊十六坪の調査	58
7	頭塔の調査	59
8	右京一条二坊四坪の調査	60
9	右京一条二坊一坪の調査	62
10	右京三条一坊八坪の調査	63
11	西一坊大路の調査	64
写 真	1 第246次調査区全景（東から）	65
	2 第246次調査 方形周溝墓SX16360（南から）	
	3 第253次調査 東一坊大路西側溝（南から）	
	4 第254次調査 七条条間北小路南側溝内祭祀土坑（北東から）	

その他の発掘調査一覧

凡　　例

1. 本書は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が1994年度に実施した平城宮跡、平城京内遺跡等の発掘調査の概要報告である。調査報告の執筆は、各現場の発掘担当者による。
2. 発掘遺構図に付した座標値は、平城宮内遺構、平城京内等遺構のいずれも国土地方眼第VI座標系による座標値である。高さはすべて海拔高で示す。
3. 遺構図には、遺構ごとに一連の番号を付け、番号の前に、S A (築地・塀)、S B (建物)、S C (回廊)、S D (溝・濠)、S E (井戸)、S F (道路)、S K (土坑)、S S (足場)、S X (その他)などの分類記号を付した。なお遺構番号のなかには仮番号で示したものもある。
4. 平城宮出土軒瓦・土器の編年は次のようにあらわす（カッコ内は西暦による略年代）。平城京内等についても、この編年に準拠している。
軒瓦；平城宮出土軒瓦編年第I期(708～721)、第II期(721～745)、第III期(745～757)、第IV期(757～770)、第V期(770～784)
土器；平城宮土器I(710)、II(725)、III(750)、IV(765)、V(780)、VI(800)、VII(825)
5. 本文未収録調査については、巻末「その他の発掘調査一覧」を参照されたい。
6. 本書の編集は、浅川滋男が担当した。

I 平城宮の調査

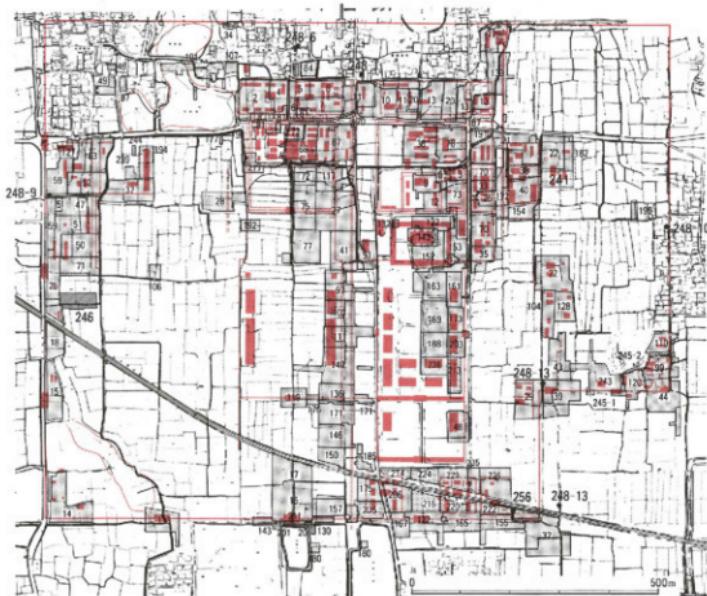


図1 1994年度平城宮内発掘調査位置図 1:10000

表1 1994年度平城宮内発掘調査一覧 (*印は卷末表5に概要を掲載)

次 数	遺 跡 名	地 区	発 掘 期 間	面 積 (a)	担当者	申 請 者	頁
246	右馬寮	6ADE	1994. 3. 10. - 7. 7.	2200	小沢 繁	奈文研	4
248- 1	内裏北外郭北方	6ABB	1994. 4. 11. - 4. 20.	43	玉田 芳英	水野健太郎、洋二／佐紀町	14
248- 6	北面大垣	6ABN	1994. 8. 19. - 9. 12.	54	加藤 真二	奈良市水道局／佐紀町	23
248- 9	馬寮推定地	6ADD	1994. 10. 19.	44	杉山 洋	奈文研	*
248-10	東院東端	6ALD	1994. 10. 31. - 11. 1.	9	杉山 洋	奈文研	*
248-13	小子門・東一坊大路	6AFF	1994. 10. 24. - 11. 23. 1995. 1. 24. - 1. 27.	120	岸本 直文 寺崎 保広	奈文研	18
256	式部省東官衛	6AAI	1994. 7. 1. - 7. 12.	140	小池 伸彦	奈文研	15

1 はじめに

平城宮西辺は、平城宮の中でも、比較的発掘調査が進んでいる地域である。まず、1963年度から1965年度にかけて、西面大垣沿いに発掘調査を実施した。1963年度の第15次調査では、西面南門にあたる玉手門を、1965年度の第25次調査では、西面中門にあたる佐伯門を確認している（『平城宮発掘調査報告IX－宮城門・大垣の調査－』1978年）。また佐伯門北東の、現在、平城宮跡資料館と第1～第4収蔵庫が建つ一帯は、1968年度から1980年度にかけて、ほぼ全域の調査を完了した。ここからは、「主馬」や「内厩」の墨書き土器が出土しており、遺構の状況や平安宮の官衙配置との比較とあわせて、この場所が、官馬の調習・飼養を職掌とする馬寮であったことが確定している（『平城宮発掘調査報告XIII－馬寮地域の調査－』1985年）。

しかしながら、佐伯門の南東の部分は、ほとんどが未調査であり、具体的な様相は不明のままであった。今回、この地域に第5収蔵庫の建設が計画されて、事前の発掘調査をおこなう運びとなり、どのような施設が存在したのか、実態の解明に期待がもたらされた。調査は、建築予定部分の全域と、その外側約4mの範囲にわたって実施することとし、遺構の状況にあわせて、部分的に拡張をおこなった。発掘面積は2200m²である。なお、今次調査区は、西が第25次調査区と一部重複するが、北は第71次調査区と連続せず、間に南北約40mの未調査地をのこす。

2 調査地の地形と基本層序

調査地は、平城京造営前の旧秋篠川東岸の微高地にあたり、北から南にむけて緩やかに傾斜する。宮廃絶後の耕地化にともなって、切土と盛土がおこなわれ、近年まで数枚の水田を形成していた。中ほどには、東西に用水路が通り、これを境として、南側は一段低くなる。

調査区の層序は、場所によって一定しないが、厚さ20～40cmの整備盛土の下が、旧水田耕土と床土となる点は共通する。その下には、古い水田耕土とみられる灰褐色砂質土が部分的に認められる。また、この下に薄く淡灰色砂質土がひろがっているが、それには弥生土器がふくまれる。平城宮の柱掘形がこの層を切り込んでいることから、宮造営時の整地土と考えておく。その下が地山で、基本的に砂と粘土の互層をなす河川堆積である。遺構面の標高は、最も高い調査区の北端中央部～西部で68.7m、最も低い調査区東南部が68.2mである。

3 奈良時代の遺構

南北塀SA16350 調査区の東端で検出した、柱間9尺の掘立柱塀である。幅2m前後、深さ0.9～1.4mの深い溝を掘り、柱を立てた後に埋め戻している。「布掘り」とよぶ工法である。ほとんどの柱を抜き取っており、大きな抜き取り穴がのこる。ただし、柱が腐朽していたためか、途中まで掘り下げたものの、結局柱を切断した例があり、そこでは、直径45cm（1尺5寸）に達する太い柱根がのこっていた。この塀は、佐伯門の北東で確認している馬寮の東限塀SA5950

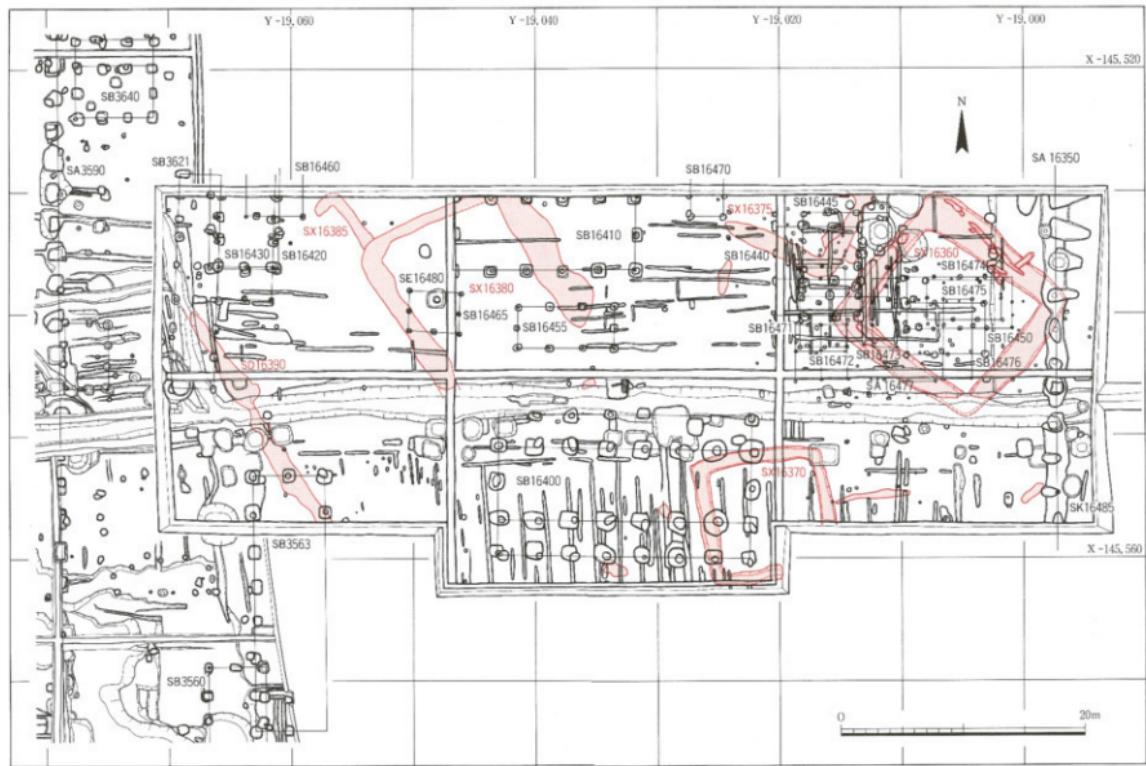


図2 第246次調査 遺構平面図 1:400(左は第25次調査区 色刷りは弥生時代の遺構)

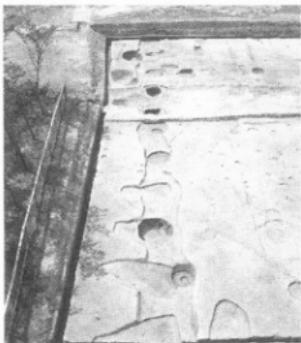


図3 南北塀SA16350（北から）



図4 正殿SB16400（東から）

の南への延長にあたり、当該官衙の東を限る施設であったことが確実である。

『平城宮発掘調査報告 XIII』によれば、SA5950は、奈良時代中頃に掘立柱塀として設けられた（SA5950A）、奈良時代後半に、築地塀に改造されている（SA5950B）。前者は、個々独立した柱掘形をもつが、柱間は9尺で、SA16350と共通する。柱根の直径も、45cmと同格である。したがって、SA16350とSA5950との間に、強い関連があったことは疑いない。同一の規格で設計されたものであろう。ただし、SA16350には、改造の痕跡が認められない。

正殿SB16400 調査区の南中央部で検出した、東西棟の掘立柱建物である。南と北に庇があり、桁行7間（70尺=10尺×7）、梁間4間（40尺=10尺×4）の規模を有する。身舎の柱掘形は、長辺が1.3～2.1mと大きいが、庇の柱掘形は、長辺1.1m前後と小型である。ほとんどの柱が、抜き取られている。抜取穴下部の収束状況から復原される柱径は、身舎柱が約30cm（1尺）ないしそれ以上、庇柱が約24cm（8寸）である。11個の柱穴を断ち割って調査したが、断面でみると、柱掘形があきらかに重複しているものが存在する。また、西南隅の庇柱のように、平面でもそれが認められる例がある。したがって、同位置で建て替えがおこなわれた可能性が高い。この建物規模は、佐伯門北東の馬奈で確認した第Ⅱ期（奈良時代初期）の正殿SB6450と等しく、区画内での位置関係も近似する。当該官衙の正殿とみて誤りあるまい。なお、このSB16400の建物心は、東限の南北塀SA16350の35.5m西にある。これは、正しく120尺に相当し、令大尺では100大尺と、さらに完数性の高い数値を得ることができる。配置に際して、大尺を使用した可能性が想定されよう。

南北棟建物SB3563 調査区西南部で検出した掘立柱建物である。第25次調査で西側柱列を検出し、『平城宮発掘調査報告 IX』では、南北塀と認識していた。今回の調査で、東側柱列の一部と北妻を確認し、桁行7間（70尺=10尺×7）、梁間2間（20尺=10尺×2）の建物となることが判明した。北妻の位置は、正殿SB16400の棟通りに一致する。正殿の東側には、対応する

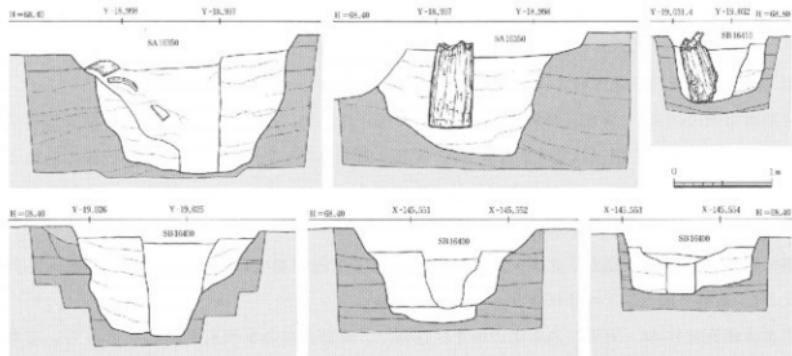


図5 第246次調査 柱穴断面図 1:50

建物が存在しないが、西脇殿に相当するものとみられる。

南北棟建物SB3621 調査区西北部で検出した掘立柱建物である。やはり、第25次調査で西側柱列を確認しており、『平城宮発掘調査報告IX』は、南北廄と推定している。今回、東側柱列を検出し、建物であることがあきらかとなった。桁行8間、梁間1間と考えられるが、西北隅の柱穴にあてているものは、ほかに比べて著しく大きい。あるいは、それを除いて、桁行7間とみる方がよいかもしれない。桁行柱間は、かなりばらつきがあるが、7.5~8尺等間と復原できる。梁間は12尺である。これを2間に割った痕跡は認められない。

東西棟建物SB16410 調査区の北中央部で検出した掘立柱建物である。桁行5間(50尺=10尺×5)、梁間2間(20尺=10尺×2)の規模を有する。当初の柱を抜き取った後、ひとまわり小さな掘形を設けて、建て替えをおこなった痕跡が明瞭にのこる。建て替え後の柱は、抜き取ったものと、切り取ったものの両者がある。後者のうち、柱根をのこすものは、直径24~30cmあり、比較的の規模が大きい。正殿SB16400とは軸線が一致しないが、後殿としての性格が想定される。ただし、正殿と併存した確証はなく、ある時期の中心的建物となる可能性ものこる。

南北棟建物SB16420 調査区西北部で検出した掘立柱建物。建物の南端部を確認したにすぎないが、桁行・梁間ともに10尺等間で、梁間は2間である。桁行は3間以上であり、調査区外にのびる。後述する建物SB16430・SB16460よりも古いが、SB3621との前後関係は不明。

南北棟建物SB16430 調査区西北部で検出した掘立柱建物である。身舎の桁行3間分を確認したが、さらに調査区外へのびる。桁行柱間は7尺等間で、南に庇をもつ。庇の出は9尺である。梁間は2間(15尺=7.5尺×2)。SB3621・SB16420よりも新しく、後述するSB16460より古い。位置関係や構造からみて、SB16420を建て替えた可能性がある。

東西棟建物SB16440 調査区の東北部で確認した掘立柱建物である。南に広庇をもち、桁行3間(24尺=8尺×3)、梁間3間(24尺=7尺×2+10尺)の規模を有する。

南北棟建物SB16445 調査区の東北部で検出した。東に庇をもつ、桁行3間（8尺×3）、梁間3間（8尺×2+8尺）の掘立柱建物である。棟方向は異なるが、位置や規模がSB16440と類似しており、それを建て替えた可能性がある。

東西棟建物SB16450 調査区の東北部で検出した掘立柱建物。削平によって一部の柱穴が消失しているが、桁行3間（21尺=7尺×3）、梁間2間（14尺=7尺×2）に復原される。ただし、後述するSB16474と、桁行および梁間の柱筋がそろっており、一体の建物となる可能性がある。とすれば、平安時代に降るかもしれない。

東西棟建物SB16455 調査区北中央部、正殿SB16400の背後で検出した。桁行3間（24尺=8尺×3）、梁間2間（12尺=6尺×2）の掘立柱建物。

南北棟建物SB16460 調査区西北部の掘立柱建物で、南妻の部分を検出したにとどまる。梁間2間（16尺=8尺×2）。SB16430より新しく、平安時代に降る可能性もある。

東西棟建物SB16465 調査区西北部から北中央部にかけて検出した。桁行2間（14尺=7尺×2）、梁間2間（12尺=6尺×2）の掘立柱建物である。後述する平安時代の井戸SE16480の掘形が、北中央の柱穴を破壊している。これも、平安時代に降る可能性がある。

南北棟建物SB16470 調査区北中央部で検出した掘立柱建物。南端部を確認したにすぎないが、梁間9尺の南北棟と推定しておく。桁行柱間は7尺である。あるいは、平安時代に降るか。

4 平安時代以後の遺構

建物6棟、塀1条、井戸3基、土坑數十基、溝數十条を検出した。建物や塀は、大多数が調査区の東北部に集中しており、同一の地域で何回か建て替えがおこなわれたと考えられる。これらは、奈良時代のものに比べて、あきらかに柱穴の規模が小さい。そのため、柱掘形の重複がほとんどなく、先後関係を判断しがたい。また、まとまりを把握できない柱穴も相当数あり、建物の実数はさらに増すものと思われる。このほか、遺物をほとんどふくまず、時期の特定が困難な遺構も多い。ここでは、平安時代の主要な遺構を、いくつか取り上げるにとどめる。

南北棟建物SB16471 桁行3間（21尺=7尺×3）、梁間2間（13尺=6.5尺×2）の掘立柱建物である。

南北棟建物SB16472 桁行2間（15尺=7.5尺×2）ないしそれ以上、梁間2間（15尺=7.5尺×2）の掘立柱建物。総柱である。

南北棟建物SB16473 桁行3間（19.5尺=6.5尺×3）、梁間1間（6.5尺）の掘立柱建物である。

東西棟建物SB16474 桁行4間（28尺=7尺×4）、梁間2間（14尺=7尺×2）の掘立柱建物。前述のように、SB16450と桁行・梁間の柱筋がそろっており、一体の建物となる可能性がある。

東西棟建物SB16475 桁行3間（21尺=7尺×3）、梁間2間（11尺=5.5尺×2）の掘立柱建物である。

南北棟建物SB16476 桁行3間（21尺=7尺×3）、梁間1間（8尺）の南北棟建物。



図6 井戸SE16480（南から）

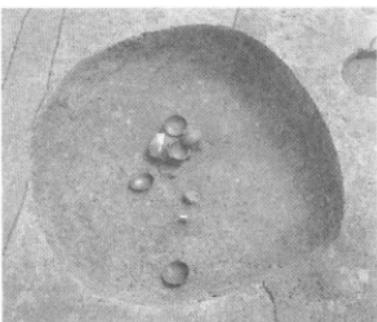


図7 土坑SK16485（北から）

東西塚SA16477 2間分を確認した。柱間は7.5尺である。南側が、用水路および水田化の際の切土によって破壊されているため、建物となる可能性がこころ。

井戸SE16480 調査区の西北部で検出した曲物の井戸である。一辺約1.6mの略方形の掘形をもつ。曲物は、三段分が遺存するが、中段のものは内側へ崩落していた。曲物と曲物の間には、板石や瓦をはさんでいる。掘形の中から、灰釉陶器や白磁が出土した。

土坑SK16485 調査区東南隅で検出した土坑。ほぼ円形で、直径1.6~1.8m、深さ約0.8m。壁面は、垂直に近く立ち上がっている。底面付近から、完形の瓦器皿5点・瓦器皿2点・庖丁1点が出土した。11世紀後半の一括遺物である。

5 弥生時代の遺構

方形周溝墓5基のほか、溝と土坑がある。遺構保護の観点から、今回は、方形周溝墓2基を完掘し、それ以外は平面の確認と断面調査にとどめている。以下、主要なものについて述べる。

方形周溝墓SX16360 調査区東北部で検出した、比較的大型の方形周溝墓である。周溝の外肩間で15m、内肩間で9.5~11mの規模を有する。削平をうけているため、主体部はまったく遺存しない。周溝は、南のコーナーが後代に破壊されているが、全体によくのこっており、とぎれる部分はない。検出面での周溝の幅は1.8~3.1m、深さは25~65cmである。西北および西南周溝は、ほかに比べて深い。また、東北周溝では、周溝埋土下から、先行する細溝と土坑を検出した。今回の調査では、横断面とあわせて、縦断面の検討をおこないながら発掘を進めたが、周溝がコーナー部分でとくに浅くなるということではなく、溝底の勾配はほぼ水平である。

周溝の埋土は、最下部に、地山のブロックをふくむ掘削直後の埋土があり、その上を、粘土と砂質土の自然堆積層が覆う。西北周溝・西南周溝の横断面をみると、ある程度埋まった後に、掘り直した可能性がある。最上部の埋土には、瓦をふくんでおり、平城宮造営時の整地土と考えられる。その時点まで、周溝が完全に埋まりきってはいなかつたことがうかがえ、興味深い。なお、西北周溝の最下部から、後述する弥生時代前期の壺用蓋形土器が出土している。

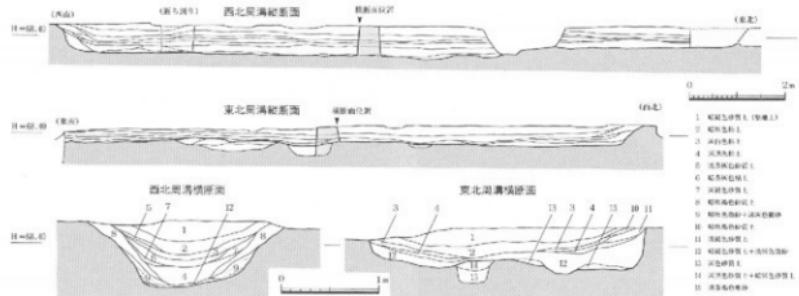


図8 方形周溝墓SX16360 縦断面(1:100)・横断面(1:50)

方形周溝墓SX16370 調査区南中央部～東南部で検出した。周溝外肩間で11m前後、内肩間で約8.5mの規模をもつ。東南コーナーが調査区外となるが、周溝はすべて連続しており、とぎれる部分はない。全体にかなり削平をうけており、主体部は完全に消失している。周溝も、北半部は深さ10～20cmと、わずかに遺存するにすぎない。一方、南周溝は40cmほどがのこる。検出面での周溝の幅は、1.0～1.3mであった。周溝埋土は、最下部に地山のブロックをふくむ掘削直後の埋土があり、上部を暗褐色砂質土の自然堆積が覆っている。

方形周溝墓SX16375 調査区東北部～北中央部で検出した、平面長方形の周溝墓である。削平のため、周溝の東南と西南の二辺および、東北コーナーを確認したにとどまる。陸橋の有無についてあきらかにしない。西南の辺が、周溝外肩間10m以上と長く、東南の辺は8.5mと短い。遺構面からの周溝の深さは、20cmないしそれ以下である。埋土の状況は、SX16370に近似する。弥生前期の土器を含む土坑を切る。

方形周溝墓SX16380 調査区の北中央部～西北部で検出した、比較的大型の方形周溝墓である。東南部がとぎれており、そこが陸橋となるものと推定される。主体部は遺存しない。西北の辺は、周溝外肩間で14～15mある。東北および西南の辺は、後代の用水路と切土のため、南端を確認することができない。ただし、用水路の肩に残る土坑を周溝の残欠とみれば、19m前後に復原可能である。東北周溝は、幅2.9mと大きく、検出面からの深さも60cm前後ある。周溝の最下部は、地山のブロックをふくむ掘削直後の埋土で、その上を厚く暗褐色砂質土の自然堆積が覆う。最上部には、やはり平城宮造営時の整地上が認められる。

方形周溝墓SX16385 調査区の西北部で検出した方形周溝墓の残欠である。遺存状況がきわめて悪く、北側のコーナーと東北周溝の一部がわずかにのこるにすぎない。平面検出の時点では、SX16380より古いとみていたが、断面調査では、それを確認するにいたらなかった。

斜行溝SD16390 調査区の西南部～西北部で検出した溝で、北西から南東に向けて流れたものと考えられる。この走向は、平城京造営前の秋篠川の旧流路方向と一致しており、周辺における

る過去の調査でも、同様の溝を確認している。溝肩はかなり出入りが激しいが、幅1.0~1.9m、深さ50cm前後である。溝の埋土は、下部にやはり地山のブロックをふくんでおり、上部は自然堆積と考えられる。上部埋土中には、相当量の土器片をふくんでいる。

6 遺物

奈良時代の遺物としては、瓦や土師器、須恵器がある。軒丸瓦は、6134A・6281A・6308Cが1点ずつ出土しており、ほかに型式を判別できないものが1点ある。軒平瓦も各種1点ずつで、内訳は、6641C・6663C・6671C・6721C・6761A・6779Aおよび型式不明品である。このほか、丸瓦67.6kg・535点、平瓦209.8kg・1894点、磚12.7kg・16点が出土した。瓦の数量と造構の状況からみて、總瓦葺の建物が存在したとは考えられない。檜皮葺や板葺を主体とし、一部に、甍棟や熨斗棟として瓦を用いた程度であろう。

平安時代の遺物としては、瓦器や白磁、灰釉陶器などが出土している。平城宮跡の西辺は、平安時代にも生活の場として使用されたことが、佐伯門北東の馬寮の調査を通じてあきらかにされている。ここでも、こうした状況をうかがうことができる。

弥生時代の遺物は、土器がほとんどであるが、ほかに碧玉の原石が1点出土している。先述の方形周溝墓から出土した蓋形土器については、次項で詳述する。 (小澤 賢)

方形周溝墓SX16360出土土器 弥生時代前期の壺用蓋形土器。縁辺は欠ける。紋様のある上面、紋様のない下面も、ともにミガキを最終調整とするらしい。また上面に限って、赤色顔料を塗布した痕跡がある。なお、紐孔は残部はない。上面には、中心に陰刻有軸木葉紋を、外側に陽刻表現の横型流水紋を配している。籠描き→ミガキの痕跡がある。籠は太い。沈線の切り合い関係から描き方を復原すると、次のようになる。木葉紋は、中心と外側の円を描いてから、軸線→弧線の順で描く。流水紋は、まず中心の円と外側の円を描いてから、短い縦線を入れ、それから横線を描く。この横線は、縦線にあてないように、細心の注意をはらって引いている。三角形抉りはない。なお、配置からみると、欠けた部分には、本来、上段に縦線が1本、下段に縦線が2本あって、横型流水紋がきっちり割りつけられていたとみられる。 (深澤芳樹)

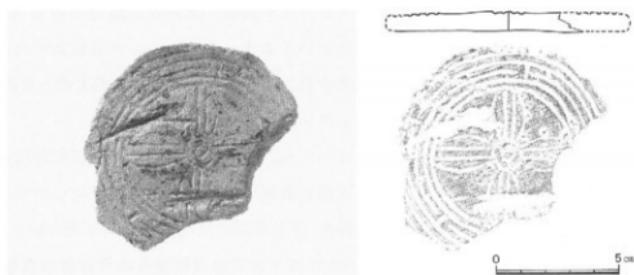


図9 方形周溝墓SX16360出土 弥生土器 1:2

4 まとめ

今回の調査では、遺物からの官衙名の特定はできなかったが、遺構の状況からみて、調査地が、平城宮西辺に存在した一官衙の正庁部分にあたることは、ほぼ確実である。そして、佐伯門の北東であきらかになっている馬寮との間に、強い類似性が認められるのは間違いない。両者の正殿の規模が一致し、相対的な位置もよく似ていること、東限の区画辯の位置が南北にそろっていることなど、いずれも配置における共通の規格性をうかがわせるものである。

佐伯門北東の馬寮は、西面中門である佐伯門から、西面北門にいたる広い地域を占め、その北半に正庁部分、南半に馬房や馬場などの飼養・調習の空間を設けたことが判明している。一方、佐伯門南東の地域は、南側の状況が不明なため、馬房など馬寮を特徴づける遺構の存在は確認できない。しかしながら、佐伯門から西面南門である玉手門までの区画を想定した場合、今回の調査地は、その北半の部分に相当し、そこに正殿をはじめとして正庁部分を構成する施設がおかれていたことになる。こうした状況は、北側の馬寮地域とあきらかに共通する。南半に馬房や馬場をもち、同様の構造をとる可能性は高いといえよう。

律令官制では、馬寮は左馬寮と右馬寮に分かれており、それが奈良時代の末に、主馬寮に一本化された。そして、平安時代のはじめに至って、再び左右の馬寮がおかれることになる。このうち、平城宮の主馬寮および前身の左右馬寮のいずれかが、佐伯門北東の地域に存在したことは疑いない。平安宮の場合、左右馬寮は、官馬の飼養・調習にあたるという職掌上の必要性からであろうが、それぞれ、かなり広大な面積を占めていた。したがって、平城宮の場合も、それとほぼ等しい規模をもっていたとすれば、佐伯門北東の、いわゆる馬寮地域だけでは、面積的に不足することがあきらかである。むしろ、今回の調査地をふくんで、平城宮西辺の広い範囲が馬寮にあてられていたと見る方が無理がない。

ちなみに平安宮では、左馬寮と右馬寮が南北に併置されていたが、その位置は、藻壁門（佐伯門）と談天門（玉手門）の間と、談天門南方である。このたびの調査地は、平安宮では左馬寮に相当する位置にあたり、位置関係からは、馬寮として全く問題はない。よって、平城宮においても、同様に左右馬寮が南北にならんでいたとすれば、北側の左馬寮に対する右馬寮が、ここにおかれていた可能性は、きわめて高いといえよう。もちろん、その確定のためには、官衙南半の状況の把握が不可欠であるが、以上の点から、佐伯門北東の西面北門との間を左馬寮、佐伯門南東の玉手門との間を右馬寮と推断したい。

なお今回の調査では、奈良時代の遺構のほかにも、平安時代の生活址や弥生時代の遺構を確認することができた。弥生時代の集落や、方形周溝墓をはじめとする墳墓については、これまでにも、平城宮西南隅でおこなった第14次調査（『奈良国立文化財研究所年報1965』 pp.30-32）や、壬生門北方で実施した第224次調査（『1991年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 pp.39-47）など、宮内のいくつかの場所で確認している。前者は、今次調査地の対岸である秋篠川旧

流路西岸の微高地にあたる。また後者は、市庭古墳（平城天皇楊梅陵）や平城宮内裏がのる洪積台地の南側にひろがる沖積層の微高地にあたっている。平城宮の造営に先立つ古墳時代や弥生時代に、この地域がさまざまな生活の場として使用されていた状況は、近年、しだいにあきらかになりつつある。そうした平城宮前史というべき歴史のためにも、今後、発掘調査と資料の蓄積・検討が進展することを期待したい。

（小澤 耕）

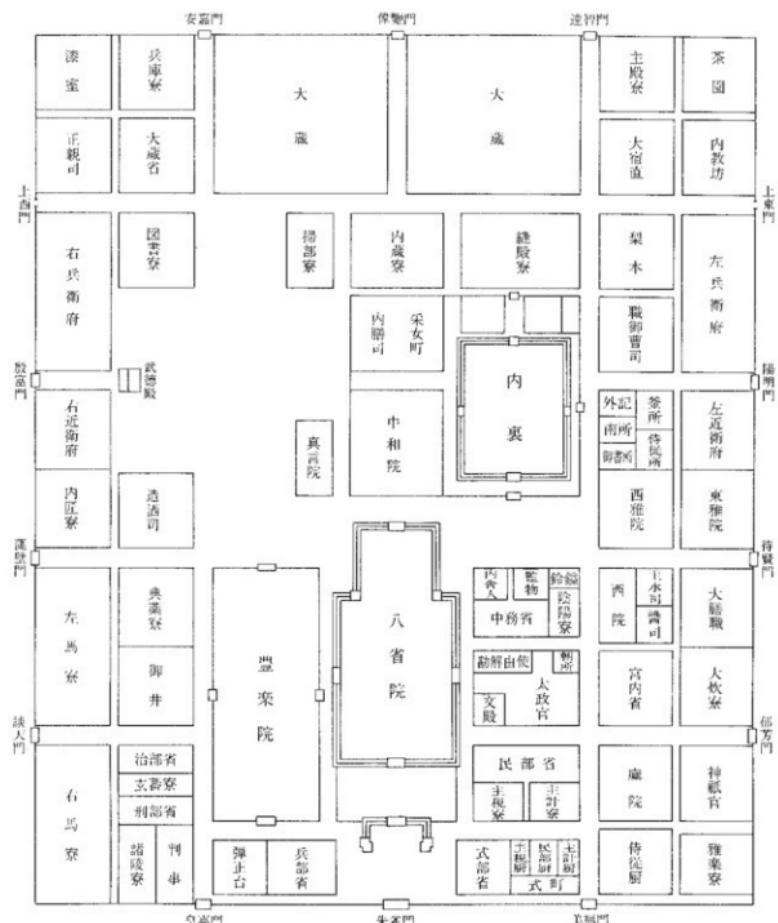


図10 平安宮復原図（『平安京概要』角川書店 1994年 p.150 図8を一部改変）

住宅改築の事前調査である。調査地は内膳司と推定されている内裏北外郭の官衙の北方で、この官衙の西面築地のさらに西方に位置している。また、市庭古墳前方部の西周濠にもあたる。

調査区は、まず幅3.5m×長さ10mの東西トレンチを設定し、そこから北へ幅2m×長さ4mのトレンチをのばし、西端では市庭古墳周濠を確認するためにサブトレンチを入れた。検出した遺構は、東西溝1条、瓦溜りおよび柱穴と、近世・近代の井戸である。SD12972は東西トレンチ中央で検出した東西溝で、幅約1.6m、深さ約0.7mを測る。その南方の瓦溜りSX16500からは、大量の丸・半瓦と、軒丸瓦6304C1点、軒平瓦6664F1点、6664K6点、6721C1点および面戸瓦1点が出土した。これらは築地の落下瓦とみられる。SD12972は第174-8次調査でも検出しており、内裏北外郭の官衙の北面築地北雨落溝と想定されていた。しかし、遺構の重複関係をみると、SX16500よりも新しく、奈良時代の溝の位置を踏襲した後世の溝と考えられる。また、サブトレンチの地表面下約2.5mの地点で、市庭古墳周濠の底を確認した。

今回の調査では、築地本体は確認できなかったものの、SX16500を検出したことによって、この位置にも築地が存在する可能性の高いことが判明した。内裏北外郭と第一次大極殿北外郭の両官衙の北面をつなぐ閉塞施設が想定されるようになった意義は大きい。 (玉田芳英)

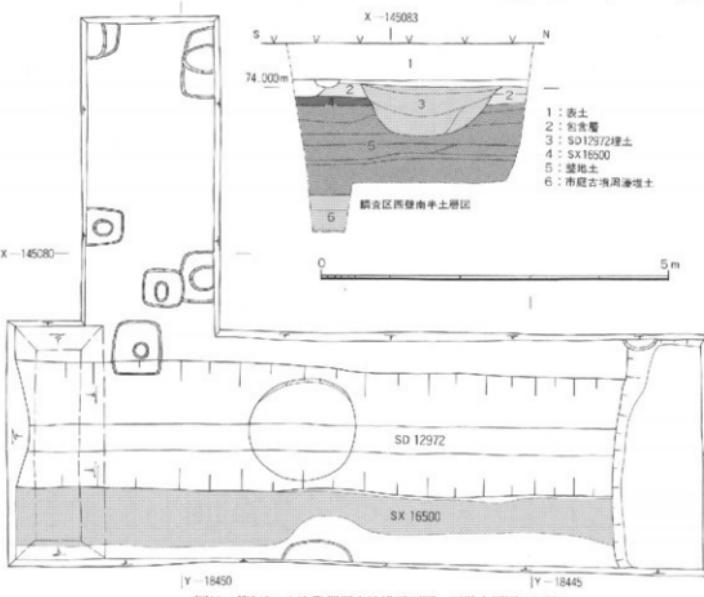


図11 第248-1次発掘調査遺構平面図・西壁上層図 1:70

1はじめに

平城宮東南隅を南北に流れる用水路の改修工事にともなう事前調査である。発掘区は「式部省東官衙」と仮称される区域にふくまれ、第222次調査区、第32次補足調査区に接している。第222次調査および第33次補足調査以外では、近年、近鉄線路をこえた西北方で第236次調査がおこなわれ、この一帯の様相がかなりあきらかになってきた。これまでの調査の結果、式部省東官衙には下層官衙と上層官衙が存在し、下層が奈良時代前半の式部省、上層が奈良時代後半の神祇官と推定されるに至っている。今回の調査地区は、この両官衙の敷地東南隅にあたるものとみられる。

本調査では、式部東官衙の東面を区画する施設の検出を主たる目的とした。さらに、第222次調査区および第32次補足調査区と約2mずつ調査地域を重複させ、既調査区で検出された遺構との連続性を確認することにもつとめた（ただし、西側重複部分の検出遺構については、遺構平面図上では省略している）。

調査期間は1994年7月1日から7月12日まで、調査面積は140m²である。調査区中央は用水路により大きく削平をうけており、その南端部の用水升部分での破損はとりわけ著しい。

2 遺構

調査区の層序は、基本的に上から真砂土（盛り土）、旧耕土、床土、灰褐色土、暗褐色～灰紫色砂質土（第2次整地土）、暗褐色粘砂質土（第1次整地上）、暗褐色粘質土（地山）、の順に堆積する。奈良時代の遺構は両整地土層の上面で検出した。検出した主な遺構には、掘立柱東南棟建物1棟、掘立柱塀2条、築地塀1条、素掘り溝2条、石組み構1条、石組み暗渠がある。これらの遺構は大きく2時期に分かれるが、ここでは第222次調査における時期区分にしたがうこととする。なお尺に換算した寸法等は小尺である。

A期 ここでA期は、第236次調査のB期に相当する。第1次整地土の上面で検出した式部省東下層官衙の遺構が、この時期に属する。

SA14681 式部省下層官衙の南面を区画する掘立柱東西塀。上層官衙の南面築地塀の下層に位置する。調査区内には3間分が存在すると推定できるが、柱穴は塀東端部の1間分に相当するもののみを確認した。柱穴のひとつは用水升により大きく破壊されている。柱間寸法は約2.4m（8尺）等間。

SA16340 式部省東下層官衙の東面を区画すると考えられる掘立柱南北塀である。下層官衙の西面を区画する掘立柱南北塀SA14682（第222次調査）・SA14685（第256次調査）から59.2m（200尺）東に位置する。塀南端部に相当する4間分を検出した。柱間寸法は、SA14681と同じく約2.4m（8尺）等間である。

B期 B期は第236次調査のC期に相当する。基本的に、第2次整地上層上面で検出した式部省東上層官衙の遺構がこの時期に属している。

SA14720 式部省上層官衙の南面を区画する東西築地塀。削平により築地積土は完全に失われており、掘込み地形も明確ではなく、後述する築地塀北側雨落溝と暗渠が検出されたことから、その存在が推定できるにすぎない。調査区南端部では暗渠以東の削平がとくに著しく、築地塀北雨落溝はおろか第2次整地土層も失われているため、暗渠以東の築地塀の位置・方向を推定する資料は得られなかった。

SB14750 第222次調査すでに検出されている掘立東西棟建物で、床束をもち南庇がつくもの。今

回の調査では、用水路により著しく削平されてはいたが、これまで不明であった東妻を検出し、その規模が確定した。身舎は梁間2間×桁行4間、柱間寸法は梁行が2.4m(8尺)等間、桁行が約2.7m(9尺)等間である。また、身舎の東妻から1間目の柱穴の柱抜き取り穴上部には、瓦片や土師器片多数が集積していたが、第222次調査のように、柱抜き取り穴に土坑が重複している状況は明確には認められなかった。

SD14721 SA14720の北側石組み雨落溝。溝の北縁に長さ約30cm、高さ約20cmの自然礫を一段、長手方向に並べて側石とする。幅約50cm、深さ約10cm。溝の上には瓦片が集積していた。

SD14751 SB14750の北雨落溝。素掘りの溝で、幅約30cm、深さ5cmである。SB14750の北庇の出は1.5mとなる。

SD16341 SD14751に接続する素振りの南北溝。幅約40cm、深さ6cm。調査区を越えてさらに北へのびており、あるいは、第222次調査で検出された掘立柱東西棟建物SB14755の東雨落溝かもしれない。その場合、SB14755の桁行は3間となる。

SX16345 築地塀SA14720下の石組み暗渠。幅約70cm、長さ約60cm、厚さ15cm程度の平たい自然石(花崗岩)を4枚以上底石に据え、底石上面の両側に長さ約30cm、幅・厚さとも20cm前後の自然礫を一列ずつ一段に並べて側石とし、天井部に長さ110cm、幅約70cm、厚さ30cm程度の自然石(花崗岩)を2枚以上のせるもの。暗渠北端部は、用水升の設置のさいに擾乱をうけており、天井石1枚、底石1枚以上、側石多数が失われている。築地西端部にある石組み暗渠SA14735との心々野距離は約53m(180尺)である。

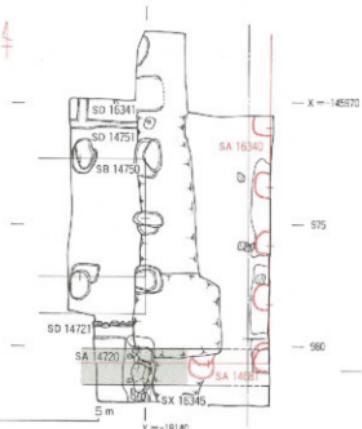


図12 第256次発掘調査遺構平面図(1:200)

3 遺 物

遺物には少量の土師器、須恵器と瓦がある。瓦は、軒平瓦6641A型式1点、丸瓦54.6kg(616点)、平瓦164.2kg(1652点)が出土した。

4 ま と め

今回の調査では、式部省下層官衙の東面を区画する掘立柱塀SA16340を検出した。この遺構は第2次整地上層の下層にあり、西面を区画する掘立柱塀SA14682・14685から性格に200尺束に位置し、柱穴・柱間寸法などの点でもSA14682・14685と同程度の規模を有しており、下層官衙の東面を区画する施設であることは誤りないであろう。上層官衙の東面を区画する施設については、西面築地塀から200尺束の地点において、南北溝あるいは南北築地塀などの明確な痕跡は認められなかった。また同地点において、南面築地塀本体も削平をうけてのこっていないことと、築地塀の北雨落溝が破壊されており、暗渠から東には存在しないことなど、東面築地塀の位置や方向を間接的に推定できる資料も今回は得られなかった。

これらは今後の大きな課題といえよう。

(小池伸彦)

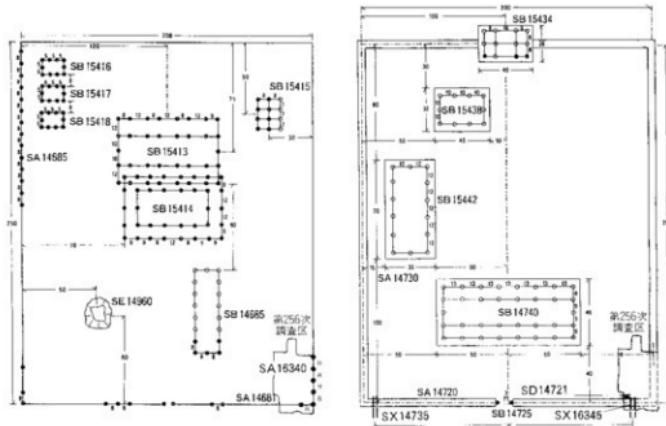


図13 式部省東官衙における建物配置の変化（左：下層、右：上層 1:1000）

1 はじめに

平城宮東院地域の水路改修工事とともになう事前調査である。現在、この一帯の排水路は、東院の西端を南流し、東院西南に開く小子門の西から東南へ流れ、そこから奈良時代の東一坊大路の東端に沿いながら南下して近鉄線の下を通り、さらに南流している。工事は、平城宮内については現在素掘りである水路を護岸し、小子門から南については、すでに構築されている擁壁を取り壊し、改めて水路を設けるものである。工事区域の幅は1~2mと狭いが総長500m近くにおよび(図1)、一部は平城宮大垣と東一坊大路の側溝にかかることが予想されたため、これらの造構の近辺で調査をおこなった。

2 小子門付近の調査

平城宮内にあたる水路改修は、小子門付近から北へ約140m分であり、門の西南で水路が東へ折れて再び南流するまでの20数mをあわせた総長160m分について、立会調査を実施した。その結果、小子門付近で2本の柱根をともなう柱穴などを確認したので報告する。

まず、小子門の西側、水路の東側法面に柱根1本があらわれた(図15)。門の棟通りにあたる位置で、築地大垣に先行する下層の掘立柱掘の柱穴である。地山の灰白砂の上に、北から南に土を入れて整地を施し、そこに南北幅1.7mの掘形を掘って、柱を立てている。柱は直径30cm弱である。西南に傾いているのは重機によるもので、また本来の埋没状況よりも、いくぶん上方に引きあげられた状態である。しかし、もともと南へやや倒れた状態で埋没していたらしく、また掘形の内側に掘り込み痕跡が認められる。築地大垣への改修時に、抜取りを試みたものであろうか。なお、この柱穴の上部には築地の積土は残存していないかった。

また、水路の東寄りで、南北にならぶ径数10cmの小さな柱穴をいくつか確認している。

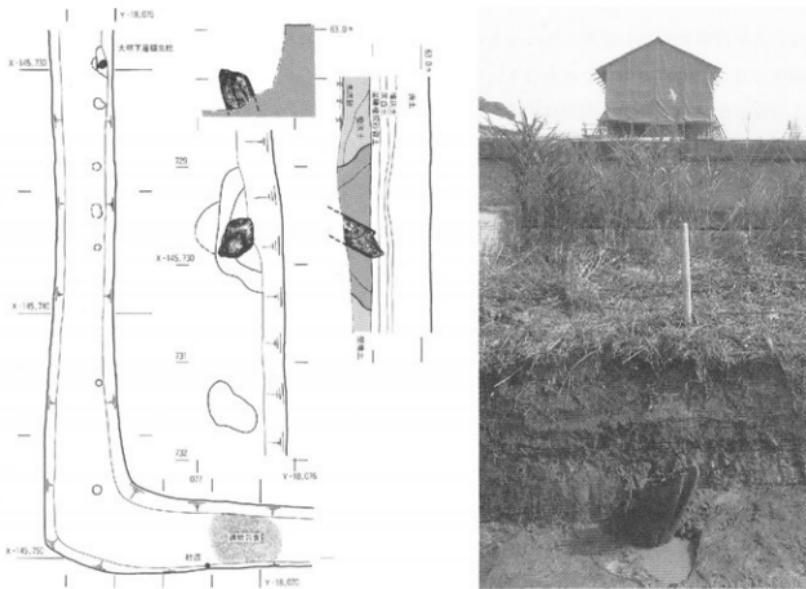


図14 水路改修工事箇所
1:2500

つぎに、水路が小子門の西南隅で東へと折れる部分で、南壁に2本目の柱根が露呈した。この付近には、小子門の西を南流する基幹排水路が通っている。当初は門の脇を直流させた（SD4951）が、神龜年間（724～729）には屈曲させてやや西側に付け替え（SD5100）、さらに神護景雲年間（767～770）にも改修している（SD5050）。柱位置は、迂回させた西側の溝の西肩近くにあたる（図17）。水路の底をさらえた状況では、SD5100は明確に検出できなかつたので、柱穴との関係は不明である。また、掘削した深さによる限り、柱根の柱掘形は確認できなかつた。同じ南壁や対岸の北壁に、これと結びつく柱穴は認められず、この柱单独であるため性格は不明である。柱根の直径は約20cm。壁面に径の3分の1ほどが露出したが、施工段階でかわせるため、現状のまま据え置くことにした。なお、この柱根の東側の水路底面には、SD5100およびSD4951にあたる、遺物を含む砂礫層がひろがっており、軒瓦等を採取した。

遺物は、水路北端部で軒平瓦6721C2点、そこから小子門までの間で軒丸瓦6284Eb・6282Ca各1点、小子門の南で軒丸瓦6311Ba・6304L各1点、軒平瓦6664F1点、鬼瓦IA1点が出土した。このうち6304Lは、良好な資料であるので図示する（図16）。

さて、小子門は平城宮東南部の入隅部分にあたり、大垣は門の西側にややのびたあと、改修した水路付近で南に折れる。確認した柱根の位置は、この大垣の入隅部分近くにあたるので、



正確な位置を落とし、周辺の発掘調査における所見と照し合せてみよう。東院南面の大垣心は第243・245次調査によりおさえられ（『1993年度平城概報』）、小子門の棟通りは正しく大垣心を通る（小沢毅「平城宮小子門の再検討」『年報』1994）。

一方、小子門から南へ折れ

る東面大垣は、おおよその推定が可能だが、正確な位置は未確定である。今回改修した水路の西側は、第29次調査によって築地基礎の掘り込み地業が認められている。この掘り込み地業の西端は、調査区の東端付近で南北に通るので、大垣心は水路内にあることが推定できる。今回の水路改修にあたっての掘削でも、西側法面には黄橙色の築地の地業が認められたが、東側の法面にはみあたらず、築地心は水路内でも西寄りと考えられよう。したがって、検出した柱根は、大垣屈曲部の心の位置にあたるものではなく、わずかに東に位置することになる。第39次調査では、この柱の東隣りにあたる、やはり柱根とともに大垣下層の柱穴を確かめている。この間の距離は、今回検出の柱位置がやや不確かだが、約2.7~2.8mほど（約9尺）になる。

以上のことから、平城宮東南入隅部分付近の復原を示したのが図17である。ところで、築地の地業が認められた水路西側の法面では、地業の積土の下に柱穴は一切認められなかった。したがって、平城宮入隅部の東面部分については、先行する掘立柱塀ではなく、当初から築地大垣が造営されていたことになる。築地に先行する掘立柱塀は、この入隅部分から始まり東へのびているのである。平城宮の大垣については、二条大路に面する南面大垣が当初から築地である一方、東院の張り出し部分、あるいは北面大垣は、築地以前に掘立柱塀があったことが判明している。今回の所見により、これら2通りの塀が作り分けられた境界があきらかになった意義は少なくないだろう。

（岸本直文）

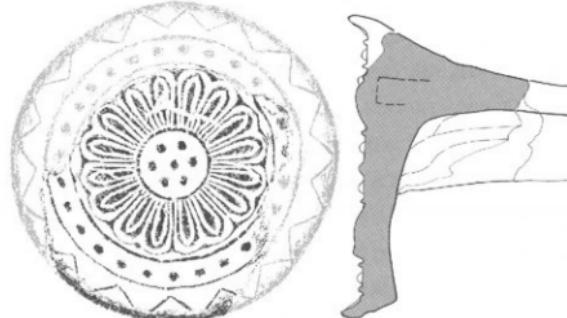


図16 小子門南で出土した軒丸瓦6304L 1:4

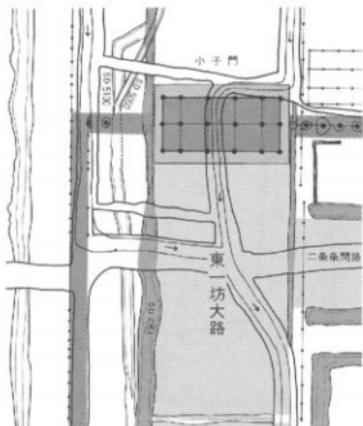


図17 平城宮小子門付近の復原 1:800

3 東一坊大路の調査

小字門以南については、主として東一坊大路の東西両側溝の確認と掘削を目的として調査をおこなった。

改修工事に先立ち、試掘のトレーンチを6ヶ所設けて調査し、その後工事のおよぶ範囲について、遺構面まで下げる遺構の有無を確認することとした。試掘の結果、第1トレーンチと第2トレーンチでは東一坊大路東側溝の西肩が検出されたものの、それより以北では東側溝がかからず、水路の位置が人路の路面にあたることが判明した。そこで、第2トレーンチ以南は発掘調査、以北は立会調査とした。また、第6トレーンチでは東一坊大路西側溝を検出し、これを掘り下げた。

層序 第1・第2トレーンチにおける層序は、耕土・床上・遺物包含層（灰褐土）をへて、現地表下約35~45cmで地山（黄灰砂）となり、この面で遺構を検出した。第6トレーンチでは耕土・床土の下に遺物包含層が3層堆積し、地表下75cmで地山（灰白シルト）となる。

遺構 ①第1・第2トレーンチ間： 東一坊大路の東側溝にあたる南北溝SD5030をの西肩を39mにわたって検出した。2ヶ所西にふくらんでいるが、ほぼY=-18042mのところを南北に走る。しかし、この溝はちょうど現水路の擁壁及び近代の旧水路SD04と重なり、溝の大半が破壊をうけており、堆積土としてのこっているのは西肩から約数十cmのみである。したがって、溝の東肩及び溝心を確定することはできなかった。

東一坊大路上には、SK01以下SK12など、大小の上坑がある。SK07が東側溝より古く遺物をふくまないのを除くと、他は瓦片をふくむ。深さはいずれも浅く、あるいは路面の凹凸を整地した土に遺物がふくまれたのかもしれない。

その他、溝SK05や井戸SE06は近代以後のものである。

②第2トレーンチ以北： 幅1~1.5mの工事範囲の立会調査のため、遺構の様相は充分にはあきらかにできないが、調査位置はすべて東一坊大路の路面にあたる。ここでも、大小様々な上坑を多く検出した。大きいものでは径5m以上におよぶものもある。土坑の年代は、軒瓦をふくみ奈良時代とみられるものを主とし、それより新しい土坑もある。第4トレーンチ付近には古墳時代と判断される斜行溝を一条検出したが、詳細は周辺の調査に委ねたい。

③第6トレーンチ： 東一坊大路西側溝にあたる南北溝SD4951を1.4m分

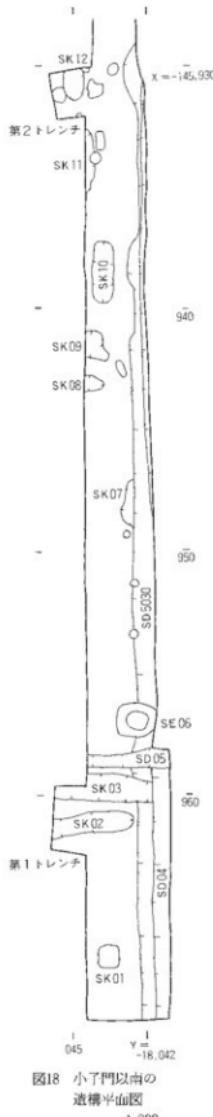


図18 小字門以南の
遺構平面図
1:200

のみであるが検出した。溝幅5.3m、検出面からの深さは80cmを測る。溝の堆積土は4層に区分され、第3層と第4層を中心には瓦・土器・木簡などの遺物が出土した。

④近鉄線以南：ここでは第32次調査で検出した二条人路南側溝SD3905の一部を再確認し、遺物を収集した。土器・瓦のほか木簡が1点出土し、天平六年の年紀をもつ。

遺物 瓦壇類の出土量が多い。発掘区全体の量は以下のとおりである。特に軒瓦は第2トレシチ以北の路面上で検出した土坑群からの出土が過半を占める。

表2 第248-13次出土瓦壇一覧

軒 丸 瓦			軒 平 瓦			丸 瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	重量	79.2 kg
6 2 2 5	A	8	6 6 6 4	F	4	点数	671
6 2 8 2	B b	2	6 6 8 5	A	1	平 瓦	
	E	1	6 6 8 8	A	1		
	F	2	6 7 2 1	C	4	重量	304.0 kg
	C	1		D	1		
6 2 8 4	C	1		G a	1	点数	2,023
6 3 0 4	L	1		?	2	壇	
6 3 0 8	A a	1	6 7 1 9	A	1	重量	10.1 kg
6 3 1 1	B a	1				点数	10
6 3 1 3	A a	1				鬼 瓦	
型式不明		6					1
軒 丸 瓦 計		26	軒 平 瓦 計		15	刻印平瓦「井」	1

木簡は西側溝SD4951から18点（うち削屑14点）、二条大路南側溝SD3905から1点が出土した。主なものは次の2点である。

SD4951出土 玉所 (59). (24). 3081

SD3905出土 隠岐国周古郡 新野郷布勢里私部□□□ 159. 30. 3 031

(寺崎保広)

本調査は、佐紀中町内の下水道埋設工事にともなう事前調査である。工事は合計23基のマンホールとそれをつなぐ管路の埋設であり、当初は立会調査で対応した。しかし、宮北面大垣推定地において、大垣の掘立柱の掘形と抜取穴を検出したことから、発掘調査を実施した。発掘調査地は第191-4次調査区の南東に隣接する道路にあり、東西約44m、南北約1.5mの範囲である。厚さ約40cmの包含層をとりのぞき、地山面で遺構の確認をおこなった。その結果、大垣の柱穴10個、東西溝（SA01）1条、南北溝3条、土抗3基を検出した。なお、発掘区以外の立会調査地においては、古代以降各時期の土抗数基を確認したにとどまった。

柱掘形は、平面が約2m四方で、地山面から約1m掘りこまれていた。抜取穴の規模も大きいので、正確な柱位置は確定できないが、柱間寸法は10尺等間と推定できる。柱抜取穴からは、奈良時代前半の軒瓦（6225A、6691Aなど）が出土している。東西溝は幅約3m、深さ約1mのもので、長さ約27m分を検出した。埋土からは、中世を中心に各時期の瓦が多量にみつかった。このほかの遺構も比較的新しいものと考えられる。

調査の結果、北面大垣が掘立柱塀であり、中門推定地付近に門が設けられていなかったことが再確認された。また、中世のものと思われる東西溝については、超昇寺城との関連も考慮する必要があり、性格の解明は今後の調査に期待される。本調査区付近では各時期の遺構の遺存状態が良好であることがあらためて確認された。今後の各種工事のさいには、慎重な配慮が必要であろう。

(加藤真二)

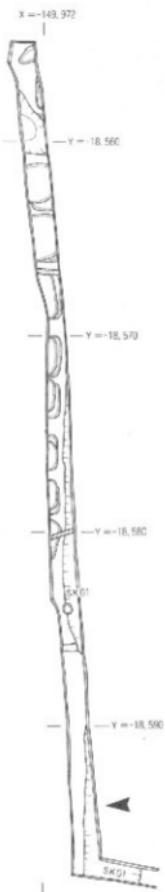


図19 第248-6次調査遺構平面図 1:250



図20 第248-6次調査位置図 1:3000

II 平城京・京内寺院等の調査

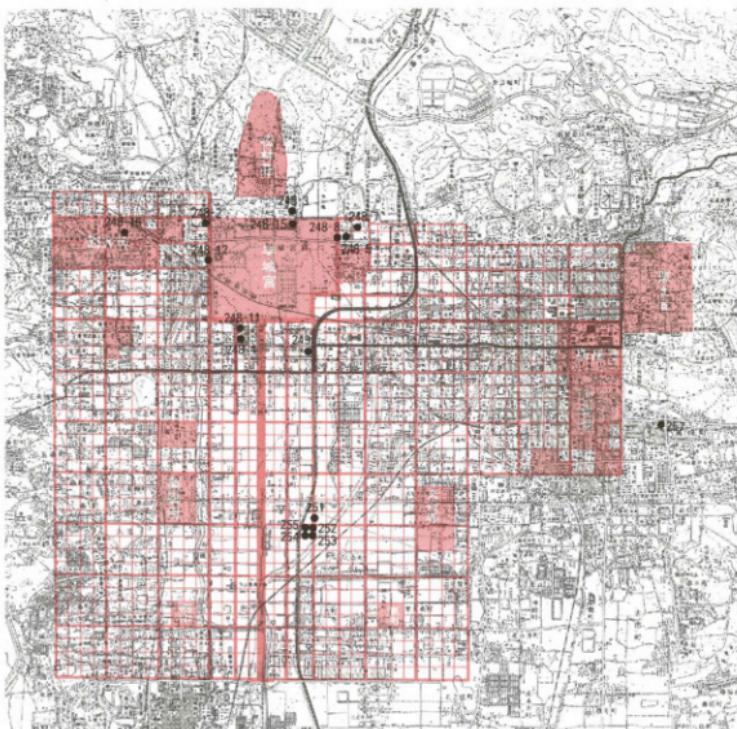


図21 1994年度平城京等発掘調査位置図 1:50000

表3 1994年度平城京内発掘調査遺跡一覧 (*印は表末表5に概要を掲載)

次数	遺跡名	地区	発掘期間	面積(㎡)	担当者	申請者	直
248-2	右京一条一坊(西一坊大路)	6AGA	1994. 6. 13. - 6. 28.	96	玉田 英	大西惠津子/佐紀町	62
248-3	平城宮北方(平城院)	6ASB	1994. 7. 17. - 19.	14	毛利光俊彦	柳木洋二/佐紀町	*
248-4	右京三条一坊(西一坊坊間路)	6AFG	1994. 8. 1. - 8. 8.	52	館野 和巳	木嶺利秋/二条大路南町	*
248-5	左京一条二坊十坪	6AFC	1994. 8. 22. - 8. 30.	36	岸本 直文	柴田勝子/法華寺町	56
248-7	左京一条二坊十六坪	6AFC	1994. 9. 17. - 9. 30.	187	山岸 常人	阪削不動産/法華寺町	58
248-8	左京一条二坊十坪	6AFC	1994. 10. 12. - 10. 20.	96	杉山 洋	村田重重/法華寺町	*
248-11	右京三条一坊八坪	6AGF	1994. 11. 7. - 11. 10.	23	臼杵 煎	佐藤 茂/二条大路南町	63
248-12	右京一条二坊四坪	6AGA	1994. 11. 28. - 12. 26.	324	杉山 洋	中西安男/二条町	60
248-14	平城宮西方(西一坊大路)	6AGA&ADC	1994. 1. 9. - 1. 13.	95	寺崎 保広	片岡区院/二条町	64
248-15	市庭古墳	6AAN	1994. 1. 18. - 1. 25.	82	加藤 真二	奈良市水道局/佐紀町	26
248-16	西大寺社境内	6BSD	1994. 1. 25. - 2. 2.	67	高瀬 要一	西大寺	*
249	左京三条一坊十四坪	6AFJ	1994. 4. 4. - 5. 23.	620	小林 雄一	トヨー	26
251	左京六条一東一坊大路	6AHK&ADD	1994. 5. 31. - 6. 21.	225	浅川 淑男	ヒラサワ	55
252	左京七条一坊十六坪	6AHH	1994. 6. 21. - 10. 26.	3900	内田 和伸	ヒラサワ	28
253	左京七条一坊十五、十六坪	6AHM&ADD	1994. 10. 13. - 12. 27.	3730	長尾 光	ヒラサワ	28
254	左京七条一坊十五、十六坪	6AHH	1995. 1. 9. - 3. 31.	3700	岩永 省三	ヒラサワ	28
255	左京七条一坊十六坪	6AHH	1995. 2. 21. - 3. 31.	2500	加藤 真二	ヒラサワ	28
257	頭塔	6BZT	1994. 11. 14.-1995. 3. 31.	解体修理	小野 健吉	奈良県	59

本調査は佐紀東町内の下水埋設にともなう事前調査である。下水管敷設に先行するマンホールの埋設時の立会調査で、周濠の落ち込みが確認されたため、発掘調査を実施した。

調査範囲は、市庭古墳前方部を中央から東に横断する道路上の東西約85m、南北約1.2mの範囲である。地山層もしくは奈良時代の整地層上面まで掘り下げた後、遺構検出をおこなった。その結果、No.2 マンホールを中心に、古墳周濠の掘りこみが始まり、それ以東には周濠を埋める奈良時代の整地層が厚く堆積することを確認した。これ以外には、No.3 のマンホールで土坑1基を確認したほか、多量の瓦を包含する南北溝1条、小土坑5基を検出した。

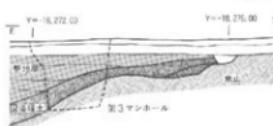
古墳周濠は、せまい平坦面をはさみながら、約30°の勾配で地山層を掘込みつつ傾斜していく。周濠埋土のうち、地山に直接のる暗茶褐色には、人頭大ないし拳大の礫が多数含まれている。礫の明解な据え付け状況が確認できなかったことから、葺石ではなく周濠当初の埋土とみなした。また、この層の上にのり、徐々に厚さを増していく茶褐色を主体とする土層群は、新しい時期の土器片をふくむことから、平城宮建設にともなう奈良時代の整地層と考えられる。なお、No.1 マンホール東で簡易ボーリング調査をおこなったが、深さは2m以上あり、試掘しても濠の底に達しなかった。

今回の調査の結果、市庭古墳東造出部の周濠位置の詳細が判明した。また、周濠の東の立ち上がりについては、今回の調査では確認できなかったが、本調査区と第223-7次調査区とのあいだの、数m中にあると推定することができよう。

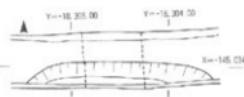
(加藤真二)



図22 第248-15次調査位置図 1:3000



①第3 マンホール



②第2 マンホール遺構図



③南北溝遺構図

図23 248-15次遺構図

共同住宅建設にともなう事前調査である。調査地は、国道368号線（大宮通り）と国道24号線の交叉点の南西に接した交通至便の地にあり、近年、とみに都市化が進んできたところである。奈良時代の条坊では、左京三条一坊十四坪の東北隅にあたる。また、かつて1967年12月から1968年4月にかけて、同坪の西辺に沿って南北約105mにわたり、第46次調査（調査面積2,290m²）を実施し、築地塀とそれに開く門、園池のほか多数の掘立柱建物や縦柱式高床倉庫を検出するなどの成果をあげている。

調査にあたり、建設予定地とほぼ重なるように、東西12.5m、南北46.5mの発掘区を設定したが、調査の過程で東辺と南端を一部拡張した。調査期間は1994年4月4日～5月23日、調査面積は拡張部をふくめて620m²である。調査地の基本的な層序は、かつて工場であった時の盛土（約40～50cm）の下に旧水田耕土、床土と続き、現地表下約70～80cmで淡茶灰褐色砂質上の遺構検出面となる。遺構検出面の標高は60.30～60.35mである。

1 遺構とその変遷

いずれも奈良時代と考えられる掘立柱塀8条、掘立柱建物12棟、土器埋納遺構1基、土坑2基などを検出した。遺構の重複関係、出土遺物等から4時期に分かれる。

I期（奈良時代初め） 発掘区中央東寄りの2間の南北塀SA5668と2間以上の東西塀SA5669のほかに顯著な遺構は認められない。

II期（奈良時代前半） 南北棟建物2棟（SB5631・SB5637）が南北に並び、敷地内を掘立柱塀で区画した様子がうかがえる。掘立柱建物SB5631は、梁間2間（8尺等間）、桁行7間（10尺等間）で、東に庇がつく。庇の出は9尺である。また、南3間分には棟通りに間仕切り用の柱穴がのこり、北側4間の「堂」的空間と南側3間の居室部分に区切られていた。居室部分の西8尺のところにある3間の南北塀SA5636は、目隠し塀もしくは居室部分の庇と考えられる。掘立柱建物SB5637は、西北の一部を検出したのみであるが、西庇をともなう。梁間、桁行ともに10尺で、庇の出は11尺。発掘区北寄りの掘立柱塀SA5641・SA5642は、鍵の手に曲る、あるいはT字形につながる塀で、東西4間分、南北2間分を検出した。柱間寸法は9尺であるが、東西塀SA5641の東から2間目が8尺と狭いことから、ここが通路になる可能性がある。

III期（奈良時代後半） II期の南北棟を東に建て替えたと考えられる配置をとる。掘立柱建物SB5630は、身舎が梁間2間（8尺等間）×桁行7間（10尺等間）で、庇の出は11尺。その南の掘立柱建物SB5638は、西北隅の一角のみを検出した。梁間、桁行とも11尺等間であり、柱掘形や柱抜取り穴の規模・形状から礎石建物の可能性もある。掘立柱建物SB5632は東妻のみを検出したが、南北に庇をともなう。桁行の規模は不明であるが、梁間、庇の出とともに11尺。掘立柱建物SB5665は、発掘区西南で検出した2間の柱穴列。柱間寸法は9尺等間で、東西棟の東妻

と考えられる。SB5663は、東西1間（7尺）で、築地等の痕跡はのこっていないが、門の可能性がある。また、南北1間のSA5664（8尺）は目隠し塀か。掘立柱建物SB5640は、梁間3間以上（6.5尺等間）、桁行1間以上（9尺）の南北棟で、東に庇をともなう。庇の出は6.5尺。

IV期（奈良時代末）　掘立柱建物SB5634は梁間2間以上（6.5尺等間）、桁行7間以上（6尺等間）の南北棟。このほか小規模な掘立柱建物が点在する。また、発掘区北西隅に土坑SK5645が掘られる。

土器埋納遺構SX5670は、2棟の南北棟SB5630・5638（Ⅲ期）の中間にあたる。須恵器壺A（奈良時代前半）に須恵器皿Cを反転させて蓋としたもので、土器内外の土壤試料の分析によると、銅刀子（全長13.0cm、刃長2.9cm）・墨挺（現存長2.5cm）・筆管（現存長11.6cm）とともに胎盤を納めていた胞衣壺という結果が得られた。

2 遺 物

総体的に出土遺物は少なく、とりわけ瓦類の出土量はわずかなので、瓦葺建物の存在は想定したい。土器は掘立柱建物SB5630の柱抜取り穴から出土した土師器・硯、土坑SK5660出土の土師器・須恵器等がある。いずれも奈良時代後半のものである。土坑SK5645からは、埴堀片、炉壁、鉱滓等の鋳造関係の遺物が出土した。そのほか、天徳2年（958）初鑄の乾元大宝8枚が出土している。

3 ま と め

十四坪は、第46次調査の成果から、園池をもつ1坪（以上）占地の宅地になる可能性が高いことが判明している。今回の調査において、4時期にわたる遺構変遷をたどるなかで、奈良時代中頃をはさむ2時期では、敷地内を塀等で区画し、建物を整然と配置した様相があきらかになった。坪の中心等、未調査部分がのこされてはいるが、この時期、坪の東北部は、主要施設が置かれた区画の一つであったと推定される。

（小林謙一）

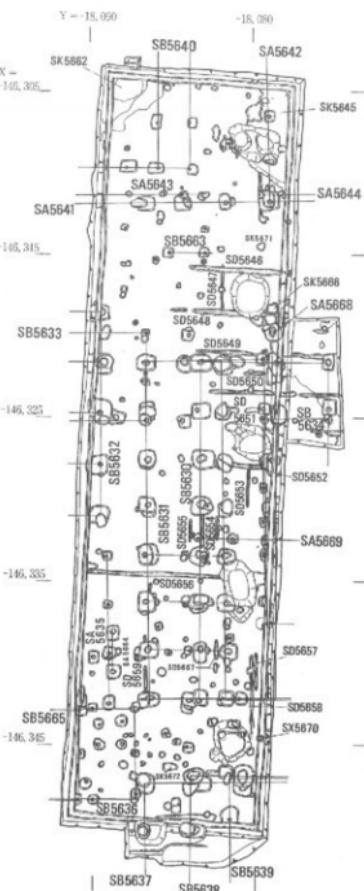


図24 第249次発掘調査遺構平面図 1:300

1 はじめに

この調査は、店舗新築の事前調査である。店舗の敷地は、東と南を佐保川、西を国道24号線（奈良バイパス）、北を県道京終停車場・薬師寺線で両された面積約31500m²を占め、平城京左京七条一坊十六坪の大部分と六条一坊十三坪・六条二坊四坪・七条一坊十五坪・七条二坊一坪の一部分にあたる。このうち七条一坊十六坪を中心とする約14055m²を、1994年5月から1995年4月まで5次にわけて調査した。第251次は東一坊大路上にトレンチを設け（225m²・別項で報告する）、第252次は十六坪の東北部・東一坊大路西側溝を中心として六条大路・東一坊大路にトレンチをのばし（約3900m²）、第253次は十六坪の東南部・東一坊大路西側溝と七条条間北小路（約3730m²）を、第254次は十六坪の西南部・七条条間北小路を中心に東一坊間東小路へトレンチをのばし（約3700m²）、第255次は十六坪の西北部（2500m²）を調査した。その結果、十六坪のほぼ全容と十五坪の一部、十六坪周囲の条坊関係遺構が判明した。本稿は3月末までに得た所見に基づく中間報告であり、遺構番号は第251次を100番台、第252次を200番台、第253次を300番台、第254次を400番台、第255次を500番台とする仮番号である。

2 遺構

調査区の基本層序は、上から水田耕土（約20cm）、床上（約40cm）、遺物包含層（黄灰色土、約20cm）が堆積し、遺物包含層を除去した面で奈良時代の遺構を検出した。この面は調査地各所で状況が異なり、奈良時代の遺物包含層が部分的にのこるほかは地山面である。地山面には平城京造営以前の河川が縦横に流れ、粘質土と砂質土が細かく入れ替わる複雑な様相を呈している。検出した奈良時代の遺構は、条坊関係遺構・十六坪内の遺構・十五坪内の遺構に大別でき、以下この順で記述する。十六坪内については、東北部・東南部・西南部・西北部で様相がきわだって異なることが判明したので、この順に分けて記述する。それぞれ第252・253・254・255の調査区にはほぼ対応するが、東南部は第252・253の両次にまたがる。 (岩永省三)

A 条坊関係遺構

a 六条大路

第252次調査で8m分を検出した。今回南北両側溝を検出し、幅員がはじめて判明した。両側溝心々距離14.1~14.6mで、14.2mとすると40大尺に復原でき、既知の他の大路（約25m・70大尺前後）より狭い。大路面は中央が高く両側溝側へ緩く傾斜する。

北側溝 幅4~6m、深さ0.8m。堆積層は大きく5層に区分できる。

南側溝 幅約4m、深さ0.7mで、東一坊大路西側溝との合流点では南北にひろがる。ほとんど埋没した時点で、幅0.7m、深さ0.3mに掘り直している。南側溝は過去に2地点（薬師寺南大門の南西側、大安寺の東側）で検出例があり、両地点を直線で結んで本調査地での位置を求



図25 左京七条一坊十六坪調査位置図 1:1000

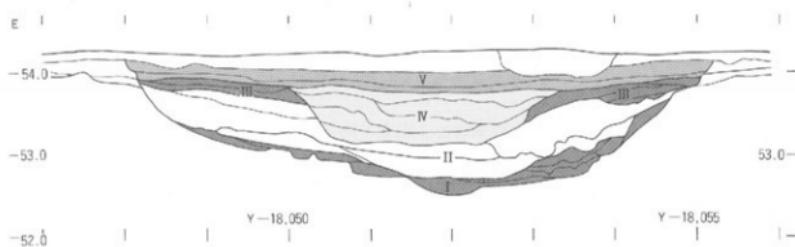


図26 東一坊大路西側溝断面図 1:60

めると、検出した南側溝の南約1mとなる。これが施工上のずれなのかは今後の検討を要する。

b 東一坊大路

第252・253次調査区東端で西側溝を142m分検出し、このうち長さ6m分については拡張トレンチを設け路面・東側溝も検出した。幅員は側溝心々で22.5mであるが、西側溝の流水で路肩が侵食されているため、正確な幅は確定しがたい。

東側溝 幅約3m、深さ0.3m。堆積層は大きく2層に区分できる。

西側溝 幅約7.6～8.3m、深さ約1.2～1.6mで、東側溝に比して規模が非常に大きく、単なる道路表面の排水処理以外に、東堀河や西一坊坊間大路西側溝と同様に運河としても機能したと考える。十六坪に面した2ヶ所に橋SX218・314（後述）が架かるが、七条条間北小路との交差点には橋の痕跡がない。流失した可能性がある。堆積層はI（奈良前半）・II（奈良後半）・III（平安前半）・IV（平安後半）・V（平安末）の大きく5層に区分できる。奈良時代後半に堆積が進み、平安時代初頭には幅は当初と変わらないものの、深さ約50cmになっていた。その後さらに堆積が進み、深さ30cmとなった時に、溝底の平安時代前期の堆積層上面から幅約2.5～3.4m、深さ約30～60cmの蛇行した溝を掘削する。平安時代後期に蛇行溝が埋没し、最終的に幅約8m、深さ20cmの浅い溝となり、両岸に入江状に入り込む部分が数カ所できる。溝を水田用水路として利用したさいにできたと考える。また第252・253次調査区の境界線北側の場所に、杭と横木によるしがらみと土留め用の石からなる堰を設けている。溝の廃絶は平安時代末である。

SX216 西側溝と六条大路南側溝との合流部の約8m南の西側溝底に、曲物を埋設した遺構。溝の流水を浄化して用いるためのものであろう。溝底の厚さ80cmの堆積層上面から直径約70cmの円形掘形を掘り、曲物を2段据える。下段は直径35cm・高さ23cm、上段は直径50cm・高さ8cmである。

SX218 西側溝に架かる橋。十六坪を南北に二分する東西溝SD207の北約16m付近にある。西岸に杭3本、溝中央に柱穴3ヶ所、東岸に石組がある。

SX314 十六坪東南隅の北約14.5m付近の西側溝底西端にある南北杭列で、杭4本を斜めに打ち込む。溝の対岸に明瞭な遺構はないが、橋の構造材の一端であろう。

SX213 大路路面上で検出した奈良時代以前の堅穴住居跡。便宜的にここに記す。1辺約4mの方形で、底部がわずかにのこる。

c 七条条間北小路

約115m分を検出した。幅は南北両側溝心々距離で約7m（20人尺）。路面幅は5m前後であるが、東一坊大路西側溝に近づくにつれ北側溝南岸が南にひろがり路面を侵食する。道路心と六条大路心との距離は約136m（460小尺）である。平城京では1町375大尺（450小尺）四方で計画条坊を設定し、通常、条坊計画線上に道路心を置くが、ここでは六条大路心の南375大尺の位置に北側溝を置いている。藤原京では条坊計画線上に小路側溝を置き、しかも坪によって

両側溝のうちどちらを条坊計画線上に置くか一定しない方式も存在した可能性が説かれている。平城京でも同じ方式を探った場所があるかどうか、今後の検討をする。

北側溝 幅1.8~2.5mで、北岸（十六坪側）は直線状を呈するが、南岸は所々南へ広がり路肩を侵食する。深さは35~60cmで、東一坊大路西側溝に近づくにつれ深くなる。堆積土は大きく3層に区分でき、少量の土器を含む。十六坪の西南隅から東へ28~41mの間で溝底が深くなる。十六坪の西端近くの底に長さ5.2m、幅1.4m、深さ40cmの土坑があり、土器片がまとまって出土した。東一坊坊間東小路を横切ってさらに西に続き、交差点では幅1.4m、深さ20cmである。

南側溝 幅1.4~2m、深さ25~40cmで、北側溝と異なり両岸ともに直線状を呈する。堆積土は大きく2層に区分でき、下層から小上器片が多数出土した。十五坪西北隅から東へ40mのところに橋脚2本の橋SX447（幅1.8m）が架かる。SX447の東28mの所では、小路路肩が南側溝側に幅3m・奥行き40cmほど張り出しており、ここも出入口であろう。十五坪の西端近くの底に祭祀土坑SX444がある。東一坊坊間東小路東側溝のところで止まり西にのびない。

d 東一坊坊間東小路

10m分を検出した。西側溝西肩は調査区外である。幅は東西両側溝心々距離で約7mと推定する。道路心は東一坊大路西側溝心と123.8m離れる。試みに東一坊大路幅を22.5mとして、東一坊大路と東一坊坊間東小路の心々距離を求めるところ135.05m（380大尺・456小尺）となり、計画条坊の1町（375大尺・450小尺）を越える。ただし、当調査区内では東一坊大路西側溝心の位置、東一坊大路幅とともに不確かであり、参考値にとどまる。七条条間北小路との交差点南寄りの路面上に土器埋納遺構SX446がある。

東側溝 七条条間北小路との交差点では幅1.3~1.7m、深さ25cmと狭く、その南北両側では、幅2.4~2.9m、深さ25~35cmである。七条条間北小路心のやや南に、桁行3間、梁間1間（6.5尺）、橋脚4本の橋SX445が架かる。

西側溝 東肩のみを検出した。深さ35cmで、幅は1.4mと推定する。

e 条坊遺構にともなう埋葬しない祭祀遺構

十六坪を囲む条坊遺構上で4ヶ所の土器埋納遺構、1ヶ所の祭祀土坑を検出した。前者は豊棺墓の可能性もあるが、現時点では内容物を特定できず、暫定的に土器埋納遺構と呼んでおく。SX215 六条大路路面上の土器埋納遺構で、北側溝側の路肩近くにある。奈良時代後半の甕2点を合口で土坑内に横たえ、長軸を側溝と直交方向に埋めたもの。上半が削平され、甕の下半1／2がのこる。甕内の土壤は脂肪酸分析中である。掘形は長楕円形で長95cm、幅50cm、現存深さ20cm。

SX316・317 東一坊大路路面上の土器埋納遺構で、七条条間北小路との交差点の北に接した路肩近くにある。2基とも奈良時代後半の甕2点を組み合わせて土坑内に横たえ、長軸を西側溝と並行に埋納したもので、掘形どうしが重複し、SX317の方が新しい。埋納坑上半が削平され、

甕は下側1／2～1／3がのこる。甕内の土壤は脂肪酸分析中である。SX316の掘形は長楕円形で長1.3m、幅60cm、現存深さ20cm。甕2点を合口で置く。SX317の掘形は楕円形で、長1m、幅60cm、現存深さ20cm。甕は合口ではなく、北側の底を打ち欠き南側の口にはめ込んでいる。

SX446 七条条間北小路と東一坊坊間東小路の交差点路面上の土器埋納遺構で、交差点の南端中央にある。土坑内に奈良時代後半の甕1点を横たえ長軸を南北方向に埋納したもの。口縁と掘形のあいだに隙間があり、石機質の蓋が存在した可能性がある。上半が削平され、甕の下半1／2がのこる。掘形は長楕円形で長47cm、幅30cm、現存深さ11cm。

SX444 七条条間北小路南側溝底の祭祀土坑。長さ6.4m、深さ50cmである。西端から（以下同様）2m付近に馬の上顎2点・下顎1点・脚部などの骨が集中し、3.2mに土師器甕1点、4m付近に人面墨書き土器1点（石で割った可能性あり）・馬上顎1点、4.8m付近に須恵器壺（漆容器片あり）・須恵器杯などが埋められていた。馬の顎骨は歯のみが残存する。出土土器の年代は奈良時代前半（平城宮土器II）である。

B 十六坪内の遺構

坪内の南北を二分する位置に東西溝SD207、東西を二分する位置に南北塀SA402がある。SD207が坪の西半部におよぶか調査区外であるため不明で、SA402は坪の北半にはおよばないが、便宜的にSD207以北の東半を「東北部」、西半を「西北部」、SD207以南でSA402以東を「東南部」、SA402以西でSD207西延長部以南を「西南部」と呼ぶ。

a 東北部の様相

十六坪東北部は、東西溝SD207を南限とする。西北部との間には溝・塀などの区画施設を検出していないが、第255次調査区東北隅で検出し十六坪の北辺中央に位置する大型建物SB506の南側には、奈良時代を通じて遺構が存在しない東西18m、南北43mの空間があることから、便宜的にSB506より東を東北部と呼ぶ。検出した遺構は、掘立柱棟建物5棟、掘立柱塀2条、溝3条、井戸1基、土坑1基である。建物のほぼ同位置での建て替えが1回あるものの、敷地の西半に東西棟建物3棟がほぼ南北に並び、東半に広い空閑地があるのが基本的遺構配置である。敷地北辺に27×16mと10×16mの未掘地があり、十六坪西北部の状況からすると、この未掘部分に建物がある可能性は否定できないが、推測の域を出ない。いずれにせよ、十六坪東南部・西南部・西北部において4時期の遺構変遷があるのとは対照的である。この配置が奈良時代を通じて存続したのか、まったく建物のない空閑地の時期もあったのか、東南部・西南部・西北部の4時期との対応関係とともに、今後の検討を要す。以下、東北部の外周を画す遺構、内部の遺構の順で記述する。

SD209 十六坪の四周のうち、六条大路に面した北面と東一坊大路に面した東面には築地塀があったと考えられるが、削平され築地本体は遺存しない。SD209は、六条大路南側溝南肩の南5.2mに心がある東西溝で、北面築地の南雨落溝であろう。幅70cm～1.1m、深さ40cmで、堆積

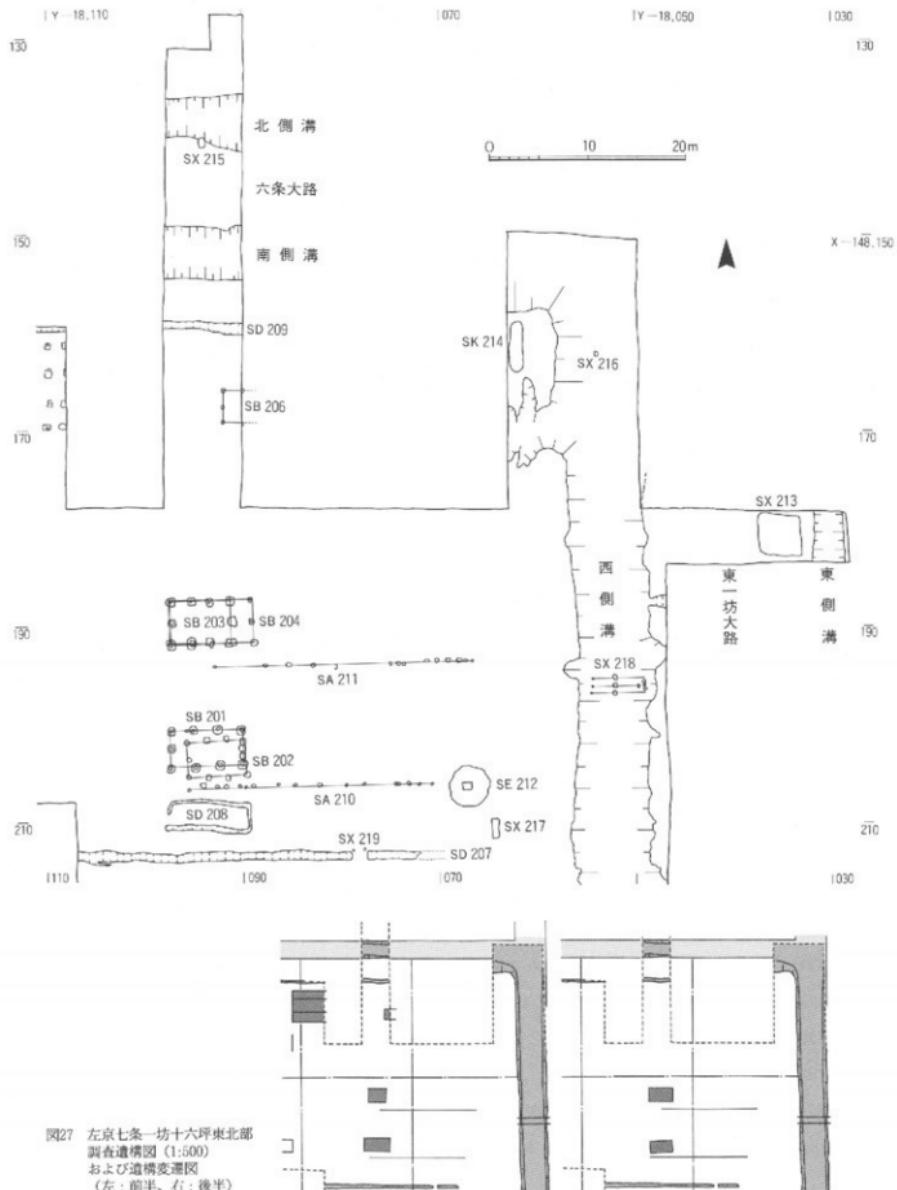


図27 左京七条一坊十六坪東北部
調査遺構図(1:500)
および造構変遷図
(左:前半、右:後半)

土は2層あり、黄褐色土からなる上層は築地の崩壊土であろう。瓦片多数と風字観が出土した。築地の北側には雨落溝を設げず、直接に大路南側溝へ排水したと考える。十六坪東北隅部ではSD209は検出できなかったので、未掘部分で途切れているのであろう。十六坪西北部で西延長部を検出した。東面築地塀の西南落溝はみつかっていない。

SD207 十六坪の南北を二分する東西溝で、幅1m、深さ20cm。六条大路と七条条間北小路の心々間距離をちょうど二分する位置にある。六条大路南側溝南肩と七条条間北小路北側溝北肩との中点、すなわち十六坪の敷地正味の中点からは約2m北へずれるから、この溝の設定は条坊計画時の奈良時代初頭に遡る可能性が大である。十六坪東南部の正殿SB220・221・305の東妻に対応する位置で1.4m途切れ、陣橋部北側に小柱穴2個(SX219)が1.2m間隔で並ぶ。簡単な門をともなう通用口であろう。SB305はA期、220はC期、221はD期であるから(後述)、奈良時代を通じて通用口であった。SD207はSX219の東5.5m以東では削平され遺存しない。

SB201 挖立柱東西棟建物で、桁行3間(8尺×3)、梁間2間(6尺×2)である。南側柱がSD207と8.9m(30尺)離れる。

SB202 SB201を東南にずらして建て替えた掘立柱東西棟建物で、桁行3間(6尺×3)、梁間2間(6尺×2)である。

SA210 SB201の南2.1m(7尺)にある掘立柱東西塀で、SB201の西から一番目の柱付近から東へ24.7mのび、SE212の手前で止まる。柱間は不揃いである。

SD208 SA210とSD207の間にあり、東西8.6m、南北3.2mの範囲をロの字状にかこむ溝。東西の端をSB201の妻にそろえる。SB201に付属する菜園の区画溝であろうか。幅15~50cm、深さ3cm程度で、一部は削平されのこっていない。

SE212 SD207の北7mにある井戸。直径約4m、深さ1.6mの円形摺鉢状掘形内に、一辺84cmの縦板組横桟どめ方形井戸枠を据える。

SB203 挖立柱東西棟建物で、桁行3間(7尺×3)、梁間2間(7尺×2)である。SB201と西妻をそろえ、南側柱がSB201北側柱と8.8m(30尺)離れる。

SB204 SB203を西妻の位置を変えずに東へ1間のばして建て替えた掘立柱東西棟建物で、桁行4間(7尺×3)、梁間2間(7尺×2)である。

SA211 SB203の南2.4m(8尺)にある掘立柱東西塀で、SB203の東から2番目の柱付近から東へ25.4mのびる。柱間は不揃いである。

SB206 挖立柱東西棟建物で、桁行2間(6尺)以上、梁間2間(6尺×2)である。南側柱がSB203北側柱と18m(60尺)離れ、北側柱がSD209南肩と5.8m(20尺)離れる。

SK214 十六坪東北隅にある南北に細長い土坑。北面築地南側溝SD209の東延長上に位置する。長5.1m×幅1.5m×深さ80cmで、漆を入れた奈良時代前半の須恵器や漆器片などが多数出土した。

(内田和伸)

b 東南部の様相

十六坪東南部は、東西溝SD207を北限、南北塙SA402を西限とする。検出した遺構は掘立柱建物 8 棟・掘立柱塙 5 条・土坑 6 基などで、各建物間には敷地を区画する明瞭な施設はなく、奈良時代を通じて東南部を一体として使用したと考える。遺構は方位の振れ、重複関係、位置関係に基づき A～D の 4 期に区分でき、A・B 期が奈良時代前半、C・D 期が奈良時代後半である。SA402については「西南部の様相」の項で記す。

A 期 敷地のほぼ中央に当坪内では規模の大きい南庇付東西棟建物SB305（正殿）、その西侧に東庇付南北棟建物SB308（脇殿）、東南側に南北棟建物SB311を置く。この 3 遺構の北・南側には広い空闊地をとる。

SB305 掘立柱東西棟建物で、桁行 5 間（8 尺 × 5）、梁間 2 間（9 尺 × 2）に南庇（出 9.5 尺）がつく。桁行の中心が坪の東西 4 等分線上にあり、南庇は坪の南北 4 等分線とほぼそろう。身舎西妻中央柱と庇西端柱の柱根がのこる。

SB308 SB305の西にある掘立柱南北棟建物で、桁行 5 間（7 尺 × 5）、梁間 2 間（6.5 尺 × 2）に東庇（山 9.5 尺）がつく。南妻がSB306の南庇と筋をそろえ、坪の南北 4 等分線上にある。東庇はSB305の西妻と 10.6m（36 尺）離れる。

SB311 SB305の東南にある掘立柱南北棟建物で、桁行 3 間（8 尺 × 3）、梁間 2 間（8 尺 × 2）であるが、南妻面では、4.5 尺 + 7 尺 + 4.5 尺の 3 間に割っており、中央に戸口を設けたと考える。北妻がSB305南庇（坪の南北 2 等分線）と 3 m（10 尺）離れ、西側柱がSB305東妻と 2.9 m（10 尺）離れる。

SX323 七条条間北小路北側溝の北側に溝と並行して並ぶ 2 個の柱穴。小路への出入口であろう。柱間 3 m（10 尺）で、溝肩から 1.2 m 離れる。B 期以降も存続すると考える。

B 期 A 期の SB305・308 は存続する。SB305 の北側に東西棟建物 SB302（後殿）を建て、SB311 を廃し東南にずらして南北棟建物 SB312 に建て替える。

SB302 SB305 の北にある掘立柱東西棟建物で、桁行 3 間（7 尺 × 3）、梁間 2 間（7 尺 × 2）である。SB305 と同様に桁行の中心が坪の東西 4 等分線上にある。南側柱が SB305 北側柱と 5.9 m（20 尺）離れる。

SB312 SB305 の東南にある掘立柱南北棟建物で、桁行 3 間（6 尺 × 3）、梁間 2 間（6 尺 × 2）である。北妻が SB305 南庇（坪の南北 2 等分線）と 11.5 m（39 尺）離れ、東側柱が SB305 東妻と 11.5 m（39 尺）離れる。

C 期 様相が大きく変わる。B 期の建物をすべて廃し、敷地の中央北端近くに南庇付東西棟建物 SB220、その南側に目隠し塙 SA303 を置き、それ以南には広大な空間をとる。坪の東西 2 等分線上の南北棟建物 SB404（「西南部の様相」の項で記述）が脇殿にあたる。

SB220 掘立柱東西棟建物で、桁行 5 間（9 尺 + 8 尺 × 3 + 9 尺）、梁間 2 間（8.5 尺 × 2）に

庇（出10尺）がつく。桁行の中心が坪の東西4等分線上にあり、北側柱がSD207南肩の南6m（20尺）にある。庇西端の柱の柱根がのこる。

SA303 SB220の南にある掘立柱東西塀で4間分（柱間6尺）を検出した。SB220の南庇と5.9m（20尺）離れる。

D期 SB220を廃し同位置で東西棟建物SB221に建て替え、日隠し解として、南側に東西塀SA301、東側に南北塀SA222を置く。C期の脇殿SB404を廃し、SB221の西南側に南北棟建物SB306を建て、その南に目隠し塀SA307を置く。

SB221 挖立柱東西棟建物で、SB220を同位置・同規模で南庇を廃して建て替えたもの。

SA301 SB221の南にある掘立柱東西塀で5間分（柱間6尺）を検出した。SB221の南側柱と3.6m（12尺）離れる。

SA222 SB221の東にある掘立柱南北塀で7間ある。柱間は不揃いで70cm～1.7m。SB221の東妻と3.3m（11尺）離れ、SD207の南側から発しSB221の南側柱筋にいたる。

SB306 SB221の西南にある掘立柱南北棟建物で、桁行3間（7尺×3）、梁間2間（6.5尺×2）である。南妻がSB221の南側柱と14.8m（50尺）離れ、東側柱がSB221の桁行中心線と7.4m（25尺）離れる。

SA307 SB306の南にある掘立柱東西塀で4間（柱間3尺）あり、両端の柱穴が他よりかなり大きい。SB306の南妻と2.7m（9尺）離れる。

SA406 SB306の西方11.9m（40尺）にある掘立柱南北塀で、2間（柱間7尺）分を第254次調査で検出した。さらに北にのびるか不明である。その西にある掘立柱東西棟建物SB415東妻とは4.5m（15尺）離れる。

SX315 東一坊大路西側溝の西岸にある土器埋納遺構で、十六坪の南北四等分線上にある。西側溝の奈良時代前半の堆積層を掘り込んで甕2点を合口で横たえ、長軸を西側溝と並行に埋めたもの。上半が削平され、甕の下半1／2がのこる。

その他の遺構 現時点で時期未確定の遺構をまとめて記述する。奈良時代以外の若干の遺構も便宜的にここで記述する。SB304はSB306の西北にある掘立柱南北棟建物で、桁行3間（6尺×3）、梁間2間（8尺+6尺）、掘形が小さい。SD309はSB308の南の浅い東西溝で、東で南に振れ西端が南へ直角に折れ曲がる。SD310はSD309の東端近くからSD309とずれて始まる浅い東西溝で、東で南に振れ東端が南に折れる。SD313は東一坊大路西側溝のすぐ西で検出した奈良時代以前の溝で東で北に大きく振れる。SK318・319・320・321・322は敷地の東南部に散在する方形の土坑で、一辺1.5～2.3m、深さ約80cm～1.6m。SK325はSB308の北に接した円形の土坑で、径2m、深さ70cm。これらの土坑は井戸枠をともなわず、井戸を試掘したが何らかの事情で途中放棄したものと考える。

（長尾 充）

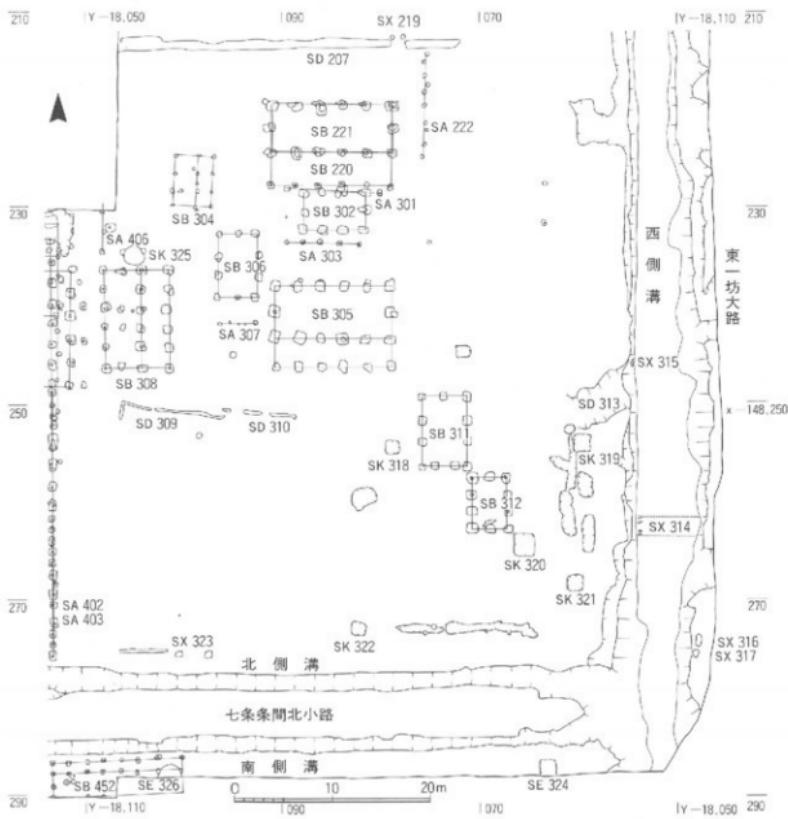


図28 左京七条一坊十六坪東南部調査遺構平面図(1:500)・遺構変遷図(左:A期、右:C期)

c 西南部の様相

十六坪西南部は、南北塀SA402・403を東限とし、北限は調査区外であるが、東西溝SD207の西延長部と想定する。掘立柱建物20棟・塀8条・井戸1基・溝1条・十坑多数があり、東北部・東南部に比して数が多い。重複関係、方位の振れ、出土遺物などに基づき、A～Dの4期に区分できる。A・B期が奈良時代前半、C・D期が奈良時代後半である。

A期 遺構の方位が北でやや西偏する。十六坪の中央に南北塀SA402があり、坪の南半を東西に二分する。以後、奈良時代を通じて坪の東半は遺構が疎、西半は遺構が密である。SA402に沿って南北棟建物SB407・413、その西の南北四等分線上にSB418、西に離れたところに縦柱南北棟建物SB428がある。SB428の周囲には空闊地がひろがる。

SA402 掘立柱南北塀で、20間分（柱間7尺）を検出しさらに北にのびる。七条条間北小路北側溝の北1mから始まっており、十六坪の南辺には築地がなかったようである。東一坊大路西側溝西肩と東一坊坊間東小路東肩との中点、すなわち十六坪の敷地正味の中央に位置する。

SB407 SA402の西側の掘立柱南北棟建物で、桁行6間（8尺×2）、梁間2間（7.5尺×2）である。SA402と1.3m（4.5尺）離れ、南妻は北側溝北肩と10.2m（35尺）離れる。

SB413 SB407北方にある縦柱の掘立柱南北棟建物で、桁行3間（5.5尺×3）、梁間3間（5尺×3）である。SB407と両側柱筋をそろえ、南妻がSB407北妻と14.5m（49尺）離れる。

SB418 SB413の西南にある掘立柱南北棟建物で、桁行5間（5.5尺×5）、梁間2間（6尺×2）である。桁行中心線が坪の南北四等分線上にあり、西側柱がSA402と14.7m（50尺）離れる。

SB528 縦柱の掘立柱南北棟建物で、桁行3間（6尺×3）、梁間3間（5尺×3）である。北妻がSB507北妻と筋をそろえ、東側柱がSB407西側柱と29.8m（100尺）離れる。

B期 A期の建物配置に近い。遺構の方位が北で東偏するものが多い。SA402は存続する。SA402沿いに南北棟建物SB409・414がある。SB414の西に空闊地をとり、それに面して東妻柱筋をそろえる2棟の東西棟建物SB424・425が並ぶ。両者の西側に南北溝SD429がある。SB409の西側、SB424の南側には空闊地がひろがり、その中央にSB423がある。

SB409 SA402の西側の掘立柱南北棟建物で、桁行6間（8尺×2）、梁間2間（7.5尺×2）である。SB407を同規模で北へ2間ずらしたもの。SA402と1.9m（6.5尺）離れ、南妻は北側溝北肩と14.9m（50尺）離れる。

SB414 SB409北方にある掘立柱南北棟建物で、桁行2間（8尺×2）、梁間2間（5.5尺×2）である。SB413の位置を踏襲する。SB409と棟通りをそろえ、北妻がSB409北妻と14.9m（50尺）離れる。

SB424 掘立柱東西棟建物で、桁行5間（5尺×5）、梁間2間（6.5尺×2）である。桁行中心線がSA402と29.5m（100尺）離れ、北側柱が北側溝北肩と35.9m（121尺）離れる。

SB425 SB424の北の掘立柱東西棟建物で、桁行5間（6.5尺×5）、梁間2間（6尺×2）に両

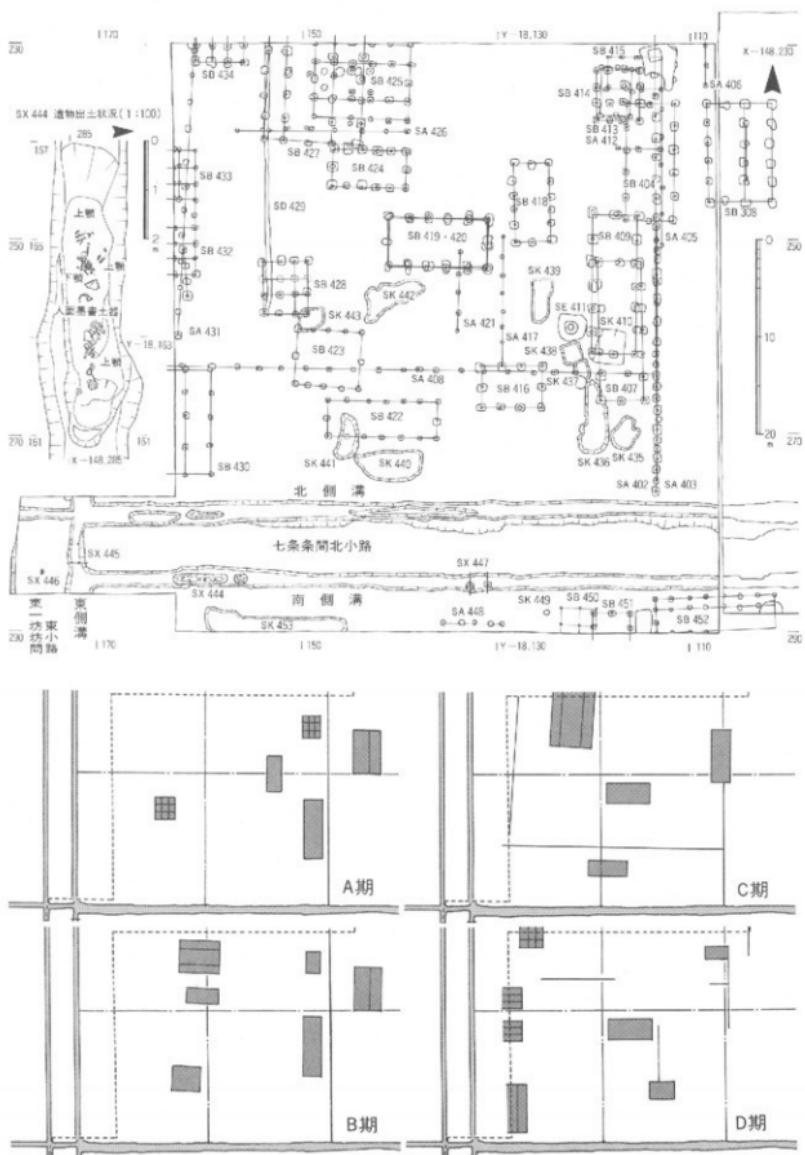


図29 左京七条一坊十六坪西南部調査遺構図(1:500)・遺構変遷図

庇（出7尺）がつく。SB424と東妻をそろえ、3m（10尺）の間隔をとる。身舎内の西妻寄りと北側寄りに不整円形（径70cm～1m）で浅い土坑が5基ある。大甃を据えた穴であろう。また身舎中央間の四隅に深い柱穴があり、建物内に何らかの施設を設けた可能性がある。

SA421 SB424の東南の掘立柱南北塀で、3間（柱間7尺）ある。SB424東妻柱筋と5.8m（20尺）離れる。

SB423 SB424の南方にある掘立柱東西棟建物で、棟通りに床束があり、桁行4間（5.5尺×4）、梁間2間（9.5尺×2）である。東妻がSB409西側柱筋と23.7m（80尺）離れるとともにSB424の桁行中心線と筋をそろえ、北側柱がSB424南側柱と14.8m（50尺）離れる。

SD429 SB424・SA425西側の南北溝で、27m分を検出しさらに南にのびると考える。幅60cm・深さ15cmで、東一坊坊間東小路東側溝東肩と17.7m（60尺）離れる。

C期 大きく様相が変化する。造構の方位が北で東偏するものが多い。B期までのSA402の位置を踏襲した南北塀SA403があり、それに接して南北棟建物SB404が建つ。SA403から発し調査区西端にいたる東西塀SA408ができ、その南の区画には東西棟建物SB422がある。SA408の北側の区画は、その西辺を南北塀SA431で画し、内部にSB419と規模の大きいSB427がある。SB404・419・427にかこまれた内側は空闊地である。

SA403 掘立柱南北塀（柱間7尺）で、B期までのSA402の位置を踏襲するが、半間北へずらし南から12間分しかない。七条条間北小路北側溝の北2.3m（8尺）から始まっており、そこを通路としたのであろうか。

SB404 SA403の北端に接した掘立柱南北棟建物で、桁行5間（8尺×5）、梁間2間（8.5尺×2）である。坪の東南部の正殿SB220に対する脇殿的建物であって、棟通りがSB220桁行中心線と28.7m（97尺）離れており、100尺離すよう計画したのであろう。また桁行中心線がSB220南庇と14.8m（50尺）離れる。

SA408 SA403の南から6本日の柱から西にのびる掘立柱東西塀（柱間8.5尺）で、19間分を検出しさらに西にのびると考える。

SB422 SA408の南にある掘立柱東西棟建物で、桁行5間（6尺×5）、梁間2間（6尺×2）である。北側柱がSA408と3.2m（11尺）離れ、東妻をSB419の桁行中心線にそろえる。

SB419 SA408北側の掘立柱東西棟建物で、桁行5間（7尺×5）、梁間2間（8.5尺×2）である。北側柱はSB404の南妻と筋をそろえ、桁行中心線がSB403と22.3m（75尺）離れる。

SB427 SB519の西北にある掘立柱南北棟建物で、桁行5間以上（7.5尺×5以上）、梁間2間（8尺×2）に両庇（出は東10尺・西7尺）がつく。身舎南から3間目に間仕切りがある。北で東偏する振れがきついが、東庇がSB404棟通りと29.7m（100尺）離れ、桁行5間とすると、桁行中心線がSB404北妻と筋をそろえるように計画したようだ。

SA431 SB427の西にある掘立柱南北塀（柱間9尺）で、11間分を検出しさらに北にのびると考

える。SA408の北3m(10尺)から発し、SB427の西庇と7.4m(25尺)離れる。

D期 C期のSB419を同位置で建て替えたSB420を中心として、方位の振れがない遺構群を整然と配置する。坪の東西二等分線上のSA403を廃し、小建物SB415から南にのびる南北塀SA405となる。SB420の周囲には、北にSA426、東南にSB416・SA417があるのみで、建物が疎になるのに対し、東一坊坊間東小路に面した敷地西辺にSB430・432・433・434が並び、敷地の利用が街路寄りに変化したと考えられる。

SB420 SB419を同位置で建て替えた掘立柱東西棟建物で、規模は変わらないが、SB419がわずかに北で東偏するのに対し、SB420は振れない。

SB416 SB420の東南の掘立柱東西棟建物で、桁行3間(7尺×3)、梁間2間(7尺×2)である。SB420の棟通りの14.6m(50尺)南を棟通りとし、西妻がSB420の桁行中心線と4.5m(15尺)離れる。

SA417 SB416の北側柱西から2本目から北へのびる掘立柱南北塀(柱間6尺前後)で、7間ある。SB420の東妻と1.6m(5.5尺)離れる。

SA405 SB420の東妻から17.8m(60尺)東にある掘立柱南北塀(柱間9尺)で、6間あり小規模な東西棟建物SB415の東妻にとりつく。

SB415 掘立柱東西棟建物で、桁行3間(6尺×3)、梁間2間(5.5尺×2)である。棟通りがSB420の北側柱筋と14.9m(50尺)離れる。「東南部の様相」の項に記したSA406は、SB415の東妻と4.5m(15尺)離れる。

SA412 SB415の南側柱の6m(20尺)にある掘立柱東西塀で、2間(柱間7.5尺)ある。SA405の柱と柱の中間から出る。

SB430 SB420の西南方にある総柱ないし東庇付きと推定できる掘立柱南北棟建物で、桁行5間(7尺×5)、梁間2間以上(9尺)である。南妻は七条条間北小路北側溝と3m(10尺)離れ、桁行中心線はSB420の南側柱と15.1m(51尺)離れる。

SB432・433 SB430の北にあり、SB420の東妻から30m(101尺)の位置を東側柱とする総柱の掘立柱南北棟建物。桁行3間(5.5尺×3)、梁間2間(7尺×2)である。両者は柱筋をそろえ、2.9m(10尺)離れる。SB432の北妻はSB430の北妻と14.6m(49尺)離れる。

SB434 SB433の北にある掘立柱建物で、総柱ないし南庇付と推定できる。柱間は東西・南北とも5.5尺。西端はSB433の東側柱と筋をそろえ、南端はSB433北妻と8.9m(30尺)離れる。

SA426 SB420・434の間にある掘立柱東西塀(柱間8.5尺)で7間あり、SB420北側柱と8.8m(30尺)離れる。

その他の遺構 現時点で時期未確定の遺構をまとめて記述する。

SE411 SB407・409の西にある井戸。掘形は最大径3m・深さ2mの不整円形である。直径80cm・長さ183cmのヒノキの大木の内側をくり抜いた材を井戸枠とする。枠上端部の裏込めには

須恵器片・磚をもちいる。井戸の廃絶は奈良時代末であり、埋土から多数の土器類が出土した。

SK410 SB407・409より古い方形大土坑。東西3.1m・南北3.6m・深さ105cm。井戸枠をともなわず、井戸を試掘したが、何らかの事情で途中放棄したものと考える。

SB420より南側には土器片を多く出土する不整形で浅い大型土坑が多数ある。遺構の切合い関係から、SK436はA期以前、SK437・438はB期以前、SK441はD期以後、SK443はC期以後である。SK440・441の埋土には炭化物が多くふくまれ、火災後の廃棄物を捨てた可能性がある。

(岩永省一)

d 西北部の様相

十六坪西北部は、東西溝SD207の西延長部を南限とし、東北部との間には溝・塀などの区画施設を検出していないが、第255次調査区東北隅で検出した十六坪の北辺中央に位置する大型建物SB506を、便宜的に東限とする。検出した遺構は掘立柱建物21棟、掘立柱塀5条、井戸4基、溝4条、土坑4基で、方位の振れ、重複関係、位置関係に基づきA～Dの4期に区分でき、A・B期が奈良時代前半、C・D期が奈良時代後半である。奈良時代を通じて比較的小規模な建物を雜然と配置している。塀を配して空間を仕切る場合でも、塀の間に間諒を広くとり、截然と空間を区画することがない形跡から、西北部全体を一体として使用したと推定する。

十六坪北面築地南側溝SD209は、西北部でも検出したが、調査区中央部で途切れる。幅1.1m、深さ40cmで、堆積土は東北部と同様に上下2層ある。溝の底面は凹凸があり、下層は断続的に存在する。上層は築地崩壊土であろう。

A期 十六坪北面築地南側溝SD209のすぐ南に、SB506・509・512を置き、南に若干控えてSB501・505・503・517・SA525を置く。いずれの建物もSB506の妻柱筋・側柱筋から、10・50・80尺といった距離をとって設定されている。

SB506 十六坪西北部の東北隅にある掘立柱東西棟建物で、桁行5間以上(6.5尺×5以上)、梁間2間(5.5尺×2)に南北両庇(出8尺)がつく。A・B期を通じ十六坪北半部の中心的建物である。桁行を5間と仮定すると、その中心が東一坊大路と東一坊坊間東小路の心々間距離をほぼ二分する位置にある。東一坊大路西側溝西肩と東一坊坊間東小路東肩との中点、すなわち十六坪の敷地正味の中点からは約3.6m東へずれるから、この建物の設定は条坊計画時の奈良時代初頭に遡る可能性が大である。SB506の北側柱はSD209心の南4.4m(15尺)にあり、SB509・512の南側柱はそれと筋をそろえる。

SB509 掘立柱東西棟建物で、桁行4間(5.5尺×4)、梁間2間(6尺×2)である。西妻がSB506西妻と29.5m(100尺)離れる。

SB512 掘立柱東西棟建物で、桁行2間以上(6尺×2以上)、梁間2間(6尺×2)である。桁行3間と仮定すると、その西妻はSB506西妻と44.5m(150尺)離れる。

SB501 掘立柱東西棟建物で、桁行3間(6尺×3)、梁間2間(6尺×2)である。東妻を

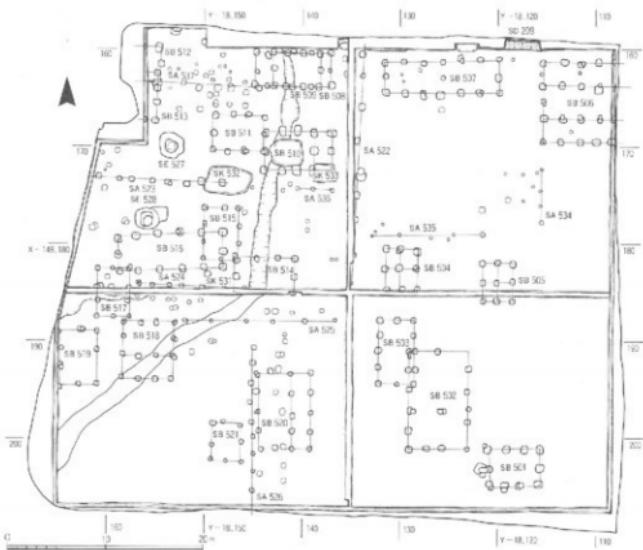


図30 左京七条一坊十六坪西北部調査造構図(1:500)・遺構変遷図

SB506西妻とそろえ、北側柱がSB506棟通りと35.6m（120尺）離れる。

SA534 SB506西妻とSB501東妻を結ぶ線上にある掘立柱南北塀で、3間（柱間は北から7.5+5+6尺）ある。

SB505 SB501の北方にある総柱の掘立柱南北棟建物で、桁行2間（6尺×2）、梁間2間（5尺×2）である。東側柱がSB506西妻柱筋と3m（10尺）離れ、桁行の中心はSB506南側柱筋とSB501北側柱筋の中央にある。

SB503 SB505の西南にある掘立柱南北棟建物で、桁行4間（6尺×4）、梁間2間（6尺×2）である。棟通りがSB506西妻柱筋と14.9m（50尺）離れ、北妻がSB506北側柱筋と23.9m（80尺）離れる。

SA526 SB503の西南にある掘立柱南北塀で、9間分（柱間6.5尺前後）を検出し、さらに南にのびる可能性がある。SB506西妻柱筋と29.6m（100尺）離れ、SB509西妻と筋がそろう。

SA525 SB503北妻と筋をそろえる掘立柱東西塀で、5間（柱間10.5尺前後）ある。SA526北端と2.7m（9尺）離れ、SB503西北隅とは4.5m（15尺）離れる。

SB517 SA525の西にある掘立柱南北棟建物で、桁行3間（5.5尺×3）、梁間2間（5.5尺×2）である。棟通りがSB506西妻柱筋と44m（149尺）離れる。

B期 SB506は存続する。SB510を建て、これを基準にSB509・512をSB508・513に建て替え、あらたに504・516を建てる。

SB510 SB506の桁行中心線から西へ29.8m（100尺）のところに桁行中心を置く掘立柱東西棟建物で、桁行4間（6尺×4）、梁間2間（6.5尺×2）である。建物内にも柱があるが、間仕切りか総柱になるのか、中世の土坑と重複するため確定的ではない。十六坪西北部では最大の柱掘形をもつ。

SA536 SB510南側柱の南1.9m（6.5尺）にある2間の掘立柱東西塀。柱掘形が小さくSB510の南庇ではなく目隠し塀であろう。

SB508 SB509の側柱位置を踏襲した掘立柱東西棟建物で、桁行3間（7尺×2）、梁間2間（6尺×2）である。SB510と東妻柱筋をそろえる。

SB513 SB510の桁行中心線から西14.5m（49尺）に東側柱を置く掘立柱南北棟建物で、桁行3間（5.5尺×3）、梁間は2間であろう。

SB504 SB510の東南側にある総柱の掘立柱南北棟建物で、桁行2間（7尺×2）、梁間2間（6尺×2）である。SB510の桁行中心線の東9m（30尺）に西側柱を置く。北妻はSA536柱筋と6m（20尺）離れる。

SB516 北で大きく西偏する掘立柱東西棟建物で、桁行5間（7尺×5）、梁間2間（6尺×2）である。同じ振れの遺構はほかにないが、A・C期の建物と重複し、D期の建物と近接することからB期とした。SB510桁行中心線の西7.5m（25尺）に東妻を設定したとも考えられる。

C期 様相が大きく変化する。遺構は北で東偏する。西北部を掘立柱塀で仕切り、さらにその中を2ブロックに分け、各1棟の建物を置く。西南部には建物2棟を置く。

SA522 掘立柱南北塀で8間あり、柱間は不整で2.3~3.6m(8~12尺)。北端はSD209のすぐ南にあり、そこから23.4m(80尺)のびる。

SA537 掘立柱東西塀で4間分を検出し、さらに西にのびる。柱間は不揃いで2.3~3.5m(8~12尺)。東端はSA522と10.4m(35尺)離れ、東に延長するとSA522と直交する。

SA523 SA537の南10.3m(35尺)にある掘立柱東西塀で、10間分を検出しさらに西にのびる。柱間は不揃いで1.2~2.2m(4~7.5尺)。東端はSA522と7.5m(25尺)離れ、東に延長するとSA522と直交する。

SA524 SA523の南10.3m(35尺)にある掘立柱東西塀で6間ある。柱間は不揃いで1.2~2.3m(4~8尺)。東に延長するとSA522の南延長部とほぼ直交する。

SB511 SA522・537・523にかこまれた区画内の掘立柱東西棟建物で、桁行3間(6尺×3)、梁間2間(6尺×2)である。

SB515 SA522・523・524にかこまれた区画内の掘立柱南北棟建物で、桁行3間(6尺×3)、梁間2間(6尺×2)である。東側柱がSA522と11.8m(40尺)離れる。

SB518 SA524の南にある掘立柱東西棟建物で、桁行3間(6尺×3)、梁間2間(5.5尺×2)に南庇(出8尺)がつく。桁行中心線がSA522南延長部と20.6m(70尺)離れる。

SB521 SB518の東南にある掘立柱南北棟建物で、桁行2間(6尺×2)、梁間2間(5尺×2)である。東側柱がSA522南延長部と10.5m(35尺)離れる。

D期 ふたたび様相が大きく変わる。遺構は北でわずかに西偏する。SD207沿いにSB507を建て、その位置を基準にやや南に距離をとって、SB502・520・514・519・SA535を配する。

SB507 SD209南肩の南3m(10尺)に棟通りを置く掘立柱東西棟建物で、桁行6間(6.5尺×2)、梁間2間(5.5尺×2)である。中央に間仕切りがある。

SB502 SB507の桁行中心線上に棟通りを置く掘立柱南北棟建物で、桁行5間(7尺×5)、梁間2間(10尺×2)であるが、南妻面では、6尺+5.5尺+9尺の3間に割っている。北妻はSB507の北側柱筋と29.6m(100尺)離れる。

SA535 SB507・502の間にある掘立柱東西塀で、5間(柱間9.5尺)ある。SB502北妻と11.9m(40尺)離れる。

SB520 SB502の西にある掘立柱南北棟建物で、桁行4間(7尺×4)、梁間2間(5.5尺×2)に庇(出7尺)がつく。南妻がSB502南妻と筋をそろえ、東側柱がSB502棟通りと15.1m(51尺)離れる。

SB514 SB520の北にある掘立柱東西棟建物で、桁行3間(6.5尺×3)、梁間2間(6尺×2)である。東妻はSB520東側柱と筋をそろえ、棟通りはSB520南妻と17.8m(60尺)離れる。

SB519 SB520の西にある掘立柱南北棟建物で、桁行3間（6尺×3）、梁間2間（6尺×2）である。西側柱がSB520東側柱筋と23.7m（80尺）離れる。

その他の遺構 現時点では時期未確定の遺構をまとめて記述する。

SE527 SB511の西にある井戸。掘形は最大径2.5m・深さ2.75mの不整円形である。井戸枠は下から順に、円形曲物（直径50cm・高さ30cm）、転用した方形木檻（一边60cm・高さ40cm）、縦板15枚を上下2段の棹木で組んだ方形枠（一边70cm・高さ1.7m）を埋設する。縦板上端部の裏込めには平瓦を並べる。埋土から多数の瓦、墨書き土器などの上器類、鳥形などが出土した。

SE528 SE527の南南西にある井戸。掘形は直径2.5m・深さ1.5mの円形で、井戸枠は抜き取られている。抜取り穴の下半が直径70cm・深さ50cmの円形、上半が一边1m・深さ1mの方形を呈すことから、SE527と類似した構造であったと考える。抜取り痕跡から多数の土器（平城宮土器II）が出土した。

SK531 SB516の南にある土器埋納土坑。直径70cmの不整円形を呈す。土師器純多數が出土した。

SK532 SB511・515の間にある土坑。東西5m・南北2.8mの不整長方形を呈す。埋土から多量の炭化物・土器片が出土した。S A 532を切りD期以降である。

SK533 SA536と重複する土坑。東西2.6m・南北2.2mの不整長方形を呈す。埋土から少量の土器が出土した。SB510を切り、C期以降である。 (加藤真二)

C 十五坪内の遺構

十五坪については、調査区南端において南北幅4m分調査したにすぎず、遺構の時期区分が困難である。七条条間北小路南側溝のきわまで建物がある。

SA488 七条条間北小路南側溝に架かる橋SX447の南方に掘立柱柱穴が5基並ぶ。掘形の規模が不整で柱間も不揃い。帰としておく。

SK449 土器埋納土坑。直径45cm・深さ19cmの円形摺鉢状を呈す。底に土師器椀（平城II）1点が上向きで据わっていた。西方1.2mにも同形同大の土坑があるが、上器はなかった。

SB450 総柱の掘立柱南北棟建物で、桁行2間以上（6尺×2以上）、梁間2間（6尺×2）である。北でやや東偏する。柱穴が小規模で中世の遺構の可能性がある。

SB451 SB450より古い掘立柱建物で、南北棟の北妻部分と推定する。柱間は桁行5尺、梁間6.5尺である。

SB452 掘立柱東西棟建物で、桁行7間（6尺×7）、梁間2間（4尺×2）に北庇（出4尺）がつく。北で西偏する。西妻は十五坪の東西二等分線上にあり、東北隅の柱は南側溝南肩と50cmしか離れない。

SK453 調査区西半にある溝状の大土坑。土器多数・青銅製責（せめ）金具が出土した。

D 平安時代の遺構

SX217 平安時代前半の木棺墓。副葬品をもつ。奈良時代の井戸SE212の東南方約5m、東一

坊大路西側溝の名残の南北溝の西方約8mにあり、軸を溝に並行したわずかに北で西偏する南北に取る。掘形は長202cm・北面幅65cm・南面幅58cm・現存深さ19cm。木棺の法量は、側板・底板が腐食した厚さ2~3cmの暗灰色粘質土の範囲からみて、長175cm・北面幅56cm・南面幅49cm・高さ19cm以上である。遺体は遺存しないが北頭位であろう。木棺中央部の下には長53cm・径3cmの角材を主軸と直行して据えて棟としていた。副葬品は棺内北端に寄せ、その中央部にガラス玉1点、北東部に漆器方形箱を置き、南東部に承和昌宝（承和二（835）年初鑄）1枚・十師器椀・漆器椀を重ね、北西部に上師器甕・皿、南西部に須恵器平瓶・承和昌宝を置く。

3 遺 物

出土遺物は多種多様である。奈良時代の遺物について出土地点で大別し、A・条坊関係遺構、B・十六坪内、C・十五坪内の順で記し、他の時代の遺物についてはDでまとめて記す。

A 条坊関係遺構の出土品

a 東一坊大路西側溝

現在コンテナ500箱分の埋土を水洗中であり、出土点数は変動する可能性がある。通常の土器（硯・製塙土器・墨書き土器「神明脣」「道麻」「洒坏」など）・木器（刀子柄・砧・柄杓・折敷・曲物・皿・杓子・檜扇・下駄・横櫛・留針・「道」木印）・金属器（鉄刀子・鉄鑿・鉄族・鉄鋤先・鉄鎌・鉄釘・鉄石突・海老鍊社金物・銅帶金具・銅瓈落）、瓦塼類のほか、祭祀関係遺物・生産関連遺物・木簡が多量にみられる。

祭祀関係遺物の年代は、同一層出土の土器や錢貨組成（和同開珎27・神功開寶20・萬年通寶6）からみて奈良時代後半～平安時代初頭である。内訳は各種材質の祭祀具がそろっており、人面墨書き土器・ミニチュア土器（壺・竈・瓶のセット）などの祭祀用土器・上馬・銅製人形2・鉄製人形15・小型素文銅鏡3・銅鈴2・木製人形19・斎串・刀形・鉾形2・共鳴槽をもつ琴形2・陽物・一本歛下駄などである。また動物骨も多量にあり、馬の四肢骨端部・下頸骨・歯が多く、牛・鹿の骨もふくまれる。

生産関連遺物は多種多量である。出土地点は、六条大路南側溝との合流部から橋SX218の間、橋SX314の北側40m、七条条間北小路側溝との合流部に集中する。内訳は、ガラス関係では坩堝・ガラス玉鑄型、金属器関係では瓶炉（铸造用）・炉壁（鍛冶ないし铸造関連のもの）・鞴羽口・鉱滓・坩堝・鉛切り屑・砥石・漆関係では漆付着土器・刷毛、などがある。これらをどこから廻棄したのかについては慎重な検討を要する。

瓦磚類は、軒丸瓦6012B・6272B・6282Bb・6282Db・6285A・6291Ab・6304L・6314A・6345新2点・軒平瓦6641J・6663F・6663J・6668B・6691A 3点・6710A・6716C・6721A 2点・6721C・6721Gb・薬師寺253、隅切平瓦2点などがある。

木簡については別項に記載と解説を掲げる。

b 六条大路

北側溝から木簡が出土した。別項に釈文と解説を掲げる。

c 七条条間北小路

北側溝から櫛・ガラス玉1点・土馬3点・6710C1点などが出土した。南側溝内祭祀土坑SK444から、馬の上顎3点・下顎1点・脚部などの骨、土師器甕1点・人面墨書き土器1点（石で割った可能性あり）・須恵器壺（漆容器片あり）・須恵器杯がまとまって出土した。馬の顎骨は歯のみが残存する。人面墨書き土器は、よくみられる祭祀専用の器形ではなく、日常用の転用である。出土土器の年代は奈良時代前半（平城宮土器II）である。

d 東一坊坊間東小路

路面上の七条条間北小路北側溝の埋土上、およびその上に形成された大土坑から6143A1点と塙がまとまって出土した。近接する別地点から廃棄されたものであろう。（加藤真二・岩永省三）

A' 条坊遺構出土の木簡

第252・253次調査で出土した木簡は現在整理中で、点数が確定していないが、削屑をふくめると数百点にのぼる見込みである。出土した遺構は六条大路北側溝と東一坊大路西側溝で、前者が3点のほかはすべて後者からの出土である。今まで確認した主要な木簡の釈文を掲げる。

六条大路北側溝出土

- ① 茄子一斗 糖十匁 (116). (14). 4 081
② □岐国寒□ (39). 19. 3 081

東一坊大路西側溝

- ③・主菜所 請「无」白大豆五合
・□口用料□・□ (154). (19). 4 081

- ④・黒木作□材木「導導」一間古□比木十四枝 「導」
・〔群カ〕 得□板□枚
十八日□楓榑十村 「□」合六百六十一枚「□□」 (253). (25). 5 081

- ⑤・府進塩肆斗二升六合 十月
料者
・十月廿一日 214. 44. 5 031

- ⑥ □口十一 史二 府一 中九 左右二 □口二 雜工卅一 □□□ (374). 14. 2 081

- 〔田カ〕
⑦・駿河国駿河郡柏原郷山□
・真高錢六百文 113. 21. 3 032

- ⑧ • 播磨國□
• 養錢□□
[六ヶ]
- (67). 17. 3 039
- ⑨ 敦賀郡返駅戸 □人万呂□三斗
[楚割ヶ]
宇和郡海部郷□知部万呂□□六斤
198. 30. 6 032
207.25.4 032
- ⑩ [五升ヶ]
大宰府貢交易油一斗□□
• 宝龟三年料
宝龟三年料
- (110). 28. 3 039
- ⑪ □上滑海藻五十斤
天平二年閏六月七日
周防國大嶋郡務理郷平群部岡調塙三斗
- (172). 21. 5 019
220. 28. 3 033
- ⑫ 布之理
天平二年九月十九日來錢十四貫
71. 17. 3 032
(298). (30). 3 051
- ⑬ 大和國忍海郡
(琴形) 251. 37. 5 061
- ⑭ [部ヶ]
良□郡隱
恋□伎隱応伎道広広麻郡
(琴形) 255. 37. 5 061
- ⑮ • 宝字七年六
月諸司繼文
• 宝字七年六□
諸司繼文
(題簽軸) (96). 36. 7 061
- ⑯ • 光光光光光□佐伯宿祢赤麻呂
外
• 佐伯宿□ 伯麻呂「千字文勅員散」
218.21.5 011

東一坊大路西側溝出土の木簡は奈良時代の堆積土の各層から出土し、年紀も今のところ天平2年から宝龟3年と長きにおよぶ。内容も文書・荷札・付札・習書とバラエティに富む。⑤⑥の「府」や⑦⑧の「養錢」などからすると、衛士に関わると推定されるものや、⑩～⑬の荷札のように官衙に供給されたとみられるものをふくむが、①の「主菜所」のような文献にみられない部署名を記す木簡もあり、全体を一括して考えるべきか否かが課題である。また⑪の「大宰府貢交易油」、⑯⑰の琴形に墨書きしたもの、⑯の「諸司繼文」の題籠軸など、これまでに類例のない木簡もある。さらに、こうした木簡がどこから廃棄されたのか、つまり周辺の遺構と直接的な関連があるのか、あるいは上流から流れてきたのか、といった問題もふくめて今後十分に検討していくなければならない。

(寺崎保広)

B 十六坪内の出土品

a 土器・土製品

硯が約10点ある。SD209からの風字硯、SB420の柱抜取り痕跡からの台付円形硯などである。SK214から漆を入れた多数の須恵器、SE527から墨書き土器、SK531から埋納された多数の土師器碗が出土した。

b 木器・漆器

SK214から漆器片、SE527から井戸枠に転用した円形曲物（直径50cm・高さ30cm）・方形木櫃（一边60cm・高さ40cm）・鳥形が出土した。

c 瓦 塙 類

軒瓦は6308C1点・6710A1点・6710C2点などしかない。平城京の宅地としては塙が比較的多く出土するのが特徴的である。SE411の井戸枠裏込めからまとまって出土したほか、柱穴の抜取り痕跡などから点々と出土する。SE527の縦板上端部の裏込めには完形の平瓦を並べており、埋土からも多数の瓦が出土した。

d 生産関連遺物

十六坪東端部から点々と生産関連遺物が出土した。金属器関係では炉壁（鍛冶ないし鋳造関連のもの）・鉱滓・坩堝、漆関係ではSK214出土の漆付着土器がある。金属器関係品の出土地点は東一坊大路最上層があふれた範囲にはば限定でき、坪内で工房の遺構も検出していない。

C 十五坪内の出土品

SK453から多数の土器片と青銅製責金具1点が出土した。SK449には土師器碗（平城宮土器II）が埋納されていた。東端部で鉱滓・坩堝が少數出土している。

D 他の時代の遺物

包含層の出土品であるが、縄文時代晚期の石鏃1点、弥生時代の石鏃1点・蛤刃石斧・石庖丁がある。弥生時代の遺物は少量ながら点々と出土しており、下層に弥生時代以前の遺構があることをうかがわせる。

平安時代前半の木棺墓SX217では、木棺は腐食し暗灰色粘質土と化していたが、副葬品がまとめて出土した。ガラス玉1点、承和呂宝（承和二（835）年初鑄）2枚、漆器の方形箱・椀、土師器の碗・壺・皿、須恵器の平瓶である。

（岩永省三）

4 まとめ

A 十六坪内の土地利用

第252～254次調査で、平城京左京七条一坊十六坪のはば全域の様相があきらかとなった。遺構の項で述べたように、十六坪の東北・東南・西南・西北の各部で遺構の様相が異なるが、各部間の区画施設の有無・種類などを根拠に、奈良時代を通じて坪の南半部・北半部がそれぞれ敷地としては一体であり、かつ東西に分けて用いていたと考える。

a. 坪の南半部 東西二等分線上の南北塀SA402は、一見、坪の南半を截然と別敷地に割るようにみえる。しかし從来、宅地割施設には道路か溝、宅地内区画施設には塀を用いる傾向が指摘されてきたから、SA402を宅地割施設と判断できない。A・B期にわざわざSA402に寄せてSB407・408・413・414を置いているのも不自然である。C期には坪の東西二等分線をまたぐSB404ができ、南半の一体性がより強まるが、宅地内区画施設としてSA402の位置を踏襲したSA403がのこる。SA402・403の東西で遺構の配置や密度が異なるのは、大型の建物を少数整然と配し、広い空閑地（儀式用？）を南にとった東半部（おもて）と、倉庫（SB413・428・432・433）や液体貯蔵施設（SB425）を配した日常生活をまかなう西半部（厨）との性格の差、空間の使い分けのためとみられる。

南半部の遺構変遷（A～D期）を通覧すると、東南部・西南部とともにB・C期間の変化が大きい。ただし東南部ではA・B期間、C・D期間の変化が小さいのに対し、西南部では各期間の変化がかなり大きい。これも東南部と西南部との性格差と関係し、フォーマルな部分は変化しにくいことであろう。

b. 坪の北半部 東北部と西北部も様相が大きく異なる。しかし両者の間にはSB506があり、溝・塀などの区画施設を検出していないことから、北半部は一体であったと考える。東北部の遺構は2時期にしか区分できず、その間の変化もほとんどないが、各期の存続年代幅と西北部のA～D期との対応関係が不明のため、北半部全体の遺構変遷が示せない。今後の課題である。暫定的に西北部のみの変化を見ると、西南部以上に各期間の変化が大きい。

c. 南半部と北半部の関係 坪の東半部では、坪を南北に二分する東西溝SD207をはさんで、南北の様相が一変する。西半部ではどうか。西南部・西北部ともに多くの建物が雑然とある点は共通する。しかし、西南部と西北部との間にはSD207の西延長部があると推定され、建物の方位についても、西南部では、北で西偏→北で東偏→北で東偏→振れがない、と変化するのに対し、西北部では、振れがない→振れがない→北で東偏→わずかに北で西偏と変化し、対応しない。こうした状況から、坪の南半部と北半部が別の敷地であった可能性を考えるが、SD207

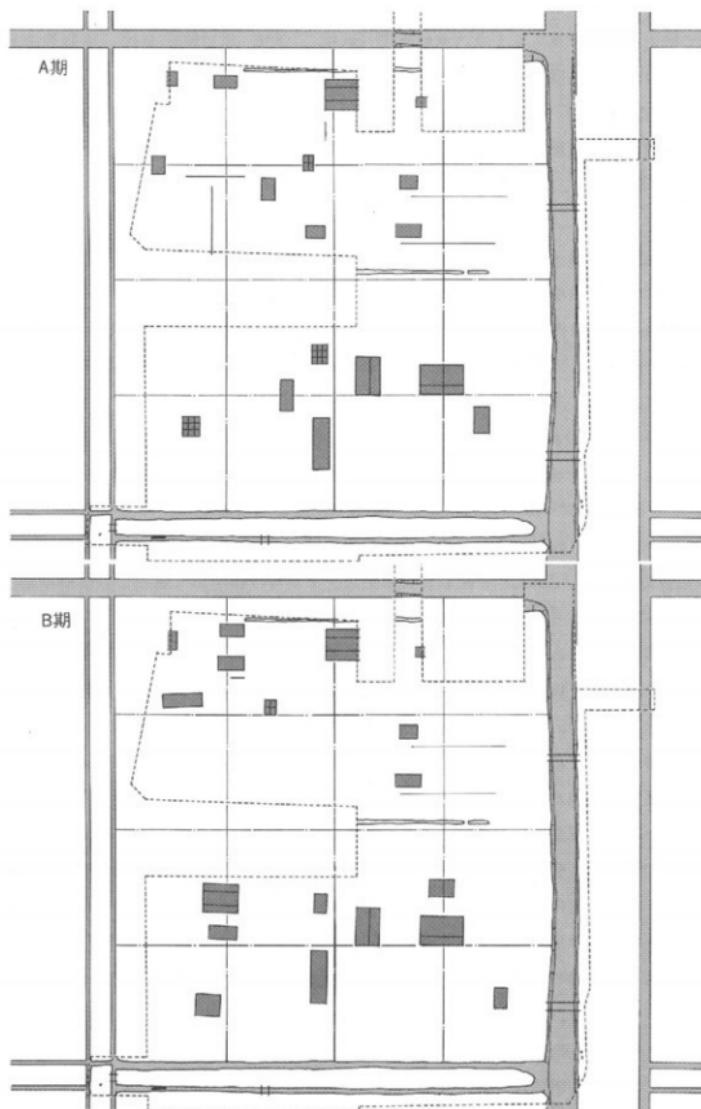


図31a 左京七条一坊十六坪造構造変遷図（上：A期、下：B期。便宜的に東北部は前半の状況を示した。）

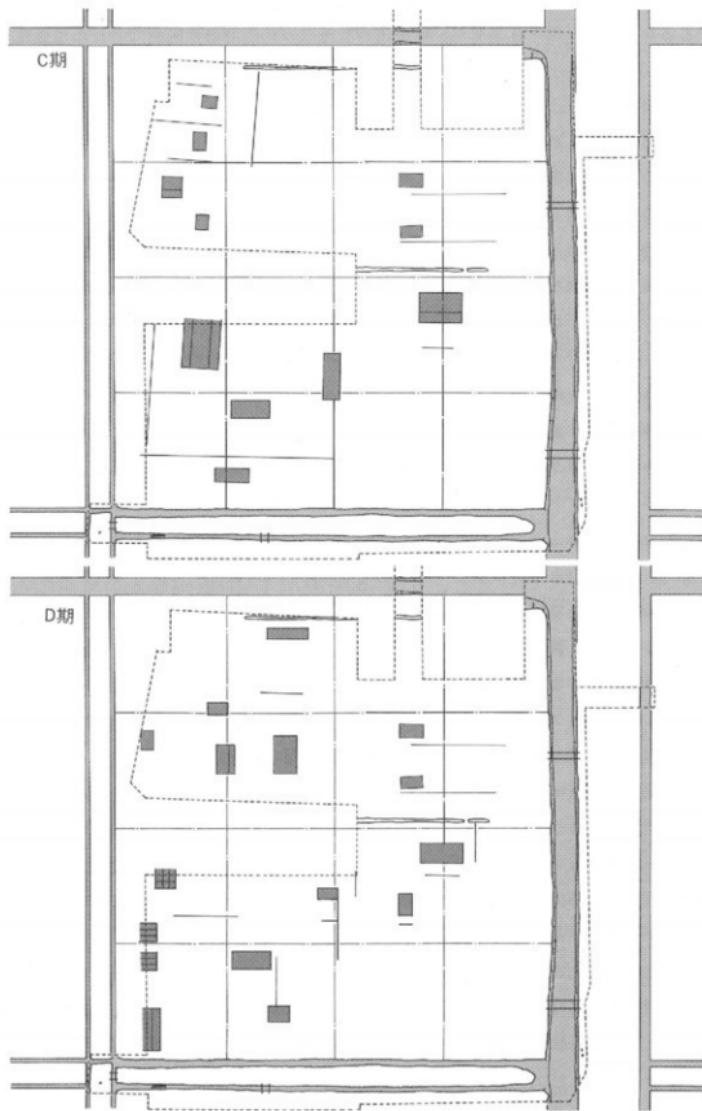


図32b 左京七条一坊十六坪造構造変遷図（上：C期、下：D期。便宜的に東北部は後半の状況を示した。）

には十六坪東南部の正殿SB220・221・305の東妻に対応する位置に出入り口があり、行き来したようであるから、南半部・北半部が一坪を占める施設の別の用途の区画であった可能性も捨てきれない。

B 十六坪の性格

十六坪の性格はどうか。東一坊大路西側溝から官衙関係の木簡がまとまって出土し、東一坊大路西側溝や坪の東端部から多種多様な生産関連遺物が出土することから、何らかの官衙ないし官営工房の存在を推定する意見もある。しかし、建物の配置は官衙的ではなく、木簡や生産関連遺物の廃棄場所が不明であるし、かりに坪内に工房があったとしても、平城京の大規模宅地内の工房の存在がほかにも知られている現状からみて、邸宅の可能性は否定できない。邸宅とすれば主の地位はどれほどか。平城京における宅地班給基準は不明であるが、藤原京のものを参考にすれば、二分の一町規模なら中級官人、一町規模なら下級貴族の宅地となる。この問題については遺物の整理の進行を待ってさらに検討したい。
（長尾 充・岩永省三）

C 祭祀関係の遺構・遺物

十六坪をかこむ条坊遺構から多量の祭祀関係遺物が出土した。

東一坊大路西側溝における祭祀遺物の出土地点は、西側溝と六条大路南側溝・七条条間北小路側溝との合流点、および西側溝に架かる橋SX218・314の両側に集中する傾向がある。多量の祭祀遺物が、出土地点と至近の場所（道路上あるいは十六坪内？）で用いられたのか、平城宮をふくむ西側溝の上流地域から流れてきたのかは、重要な問題である。また多種多様な祭祀遺物が、いかなる祭祀と関わり、同時に用いられたのか否か。従来、金属製祭祀遺物は人祓などとの関連が指摘されてきたが、ここでの例もそうであるのか。今後、十六坪脇の西側溝に祭祀遺物が集積していったプロセスを解明するとともに、平城京内の他の集中出土祭祀遺物と組成の共通点・相違点をあきらかにし、上記の諸問題を解明する予定である。

また、多量の動物骨についてはどう考えるべきか。かつて、右京八条一坊の調査で今回同様に側溝から出土した多量の動物骨について、皮革生産と関連させた解釈が発表された。しかし、七条条間北小路南側溝の祭祀土坑SX441では、西側溝と同様な組成の馬骨が出土している。西側溝では祭祀土坑が検出されておらず、動物骨の分布も比較的広範囲ではあるが、祭祀との関連性も考慮する必要があろう。

七条条間北小路南側溝中の祭祀土坑SX441は、側溝に流水がない時に、溝底に穴を穿ち、切断した馬の頭部・脚部などを、人面墨書き土器など祭祀に使用した上器類とともに納め埋めたものである。たんに側溝に馬の死体を捨てたのではない。長岡京でも二条大路南側溝と東二坊大路西側溝の合流部の上坑に、馬1頭を人面墨書き土器・ミニチュア竈・土馬・鉄鎌・木製鳴鏑などとともに埋めた例がある。崇り神の怒りを鎮めるために、犠牲として馬や牛を殺して供え、のこった頭・脚を埋める慣行の存在が推定されているが、本例もそれに相当し、財力ある個人

の臨時祓に関わる可能性がある。十六坪をかこむ条坊道路上の4ヶ所、十六坪内の1ヶ所に上器埋納造構がある。従来、宅地内や建物の入口の土器埋納については、胞衣（えな＝胎盤）埋納の可能性が考えられているが、道路上の例の性格については検討を要する。人を呪うための品物、あるいは再生を願って死産兎を埋めた可能性がある。（祭祀遺物については水野正好氏の御教示を得た。）

(加藤貞二・岩永省三)

II-4 左京六条・東一坊大路の調査 第251次

第252～255次調査に先立ち、六条人路の北側で、東一坊大路の東西幅を確認するため、南北5m×東西45mのトレンチをあけ調査したが、明確な条坊遺構は確認できなかった。この地区はセリやガマの群生する湿地帯で、水分を多量にふくんだ表土および旧耕土の深さは60～70cmもある。その下層にあたる黄褐色混暗灰褐色粘土層からは、中世の土器と瓦が出土した。トレントの東端の部分では、この中世の地層の直下（地表面からの深さ約1m）で、砂質の地山が検出されたが、東壁から3.2mほどのところから西側は沼状の遺構SX102となる。その埋土からは、ごく少量ながら、奈良時代の須恵器や軒瓦も出土した。軒瓦は2点のみで、1点は型式不明の軒丸瓦、他の1点は6681A式の軒平瓦である。SX102の中央部分は、さらに複雑にくぼんでおり、斜行溝状の遺構SX103・SX104も検出した。これらの沼状遺構は、もっとも深いところで地表面から2m以上、東の地山面からの深さが120～130cmある。また、SX102の北東隅では、それよりも新しい井戸SE101を検出した。1辺が1.7m前後で、地山面からの深さも1.7mほどである。

(浅川滋男)

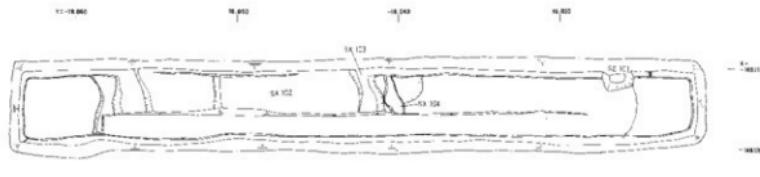


図32 第251次調査地図 1:300

家屋改築にともなう調査である。調査地点は法華寺の北方にあたり、遺存地割からの平城京条坊道路の復原によると、この左京一条二坊はやや不規則な地割りが考えられてきた。調査地付近の位置には、左京一条二坊の十坪（南側）と九坪（北側）の間を通る東西の小路が想定されており、敷地の北寄りに東西南北 6 m 四方の調査区を設定した。遺物はほとんどなく、時期は不確かだが、小規模な掘立柱の南北塀 1 条（SA01）と東西棟建物 1 棟（SB01）、土坑 1 基（SK01）ほかを確認した（図33）。塀は柱間約 2.1m の 3 分間で、柱筋は真北に対してやや東偏する。東西棟はほぼ正東西に桁行方向をおき、その柱間は約 2 m、梁間は妻柱を検出していないが、2 間分で約 3.6 m である。発掘区東壁位置で北側柱が未検出であるが、4 間以上の東西棟になると考えられる。なお、当初想定していた東西小路は検出できなかった。

出土遺物はほとんどなく、取り上げるべきものもない。ここで問題にしたいのは、遺構検出面の地盤である。調査の最終段階で、四周の壁際を掘り下げ、土層の観察をおこなった結果、遺構が人工的に互層に積み上げられた地盤を掘り込んでいることが確かめられた。この人為的な地盤はどのような性格をもつのであるか。本調査区より東側の第118-4 次調査では、地山が一段下がり、その凹部に黄褐色の土があって、その面で奈良時代の遺構を確認している。調査者は、これを掘込み地業とみて、礎石建物の遺構と考えている。今回の調査で認められた互層の地盤についても、当初は掘込み地業であるとも考えられた。かりに掘込み地業であるとすれば、SB01は礎石建物の可能性もあるわけだ

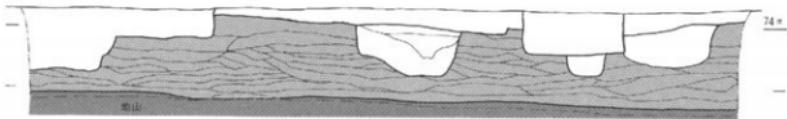
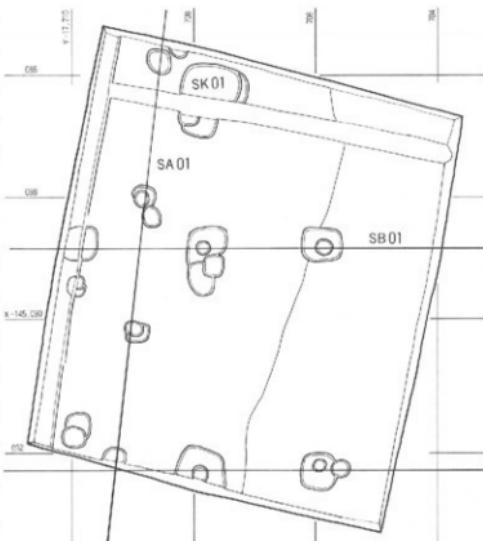


図33 第248-5次調査遺構図 (1:80) と層位図 (1:40)

が、その柱掘形は掘立柱建物の形状を示している。また、梁間2間の礎石建物ならば、掘込み地業の北端が調査区内におさまるべきと思われるが、調査区全面にわたって同じ地盤であり、庇柱が存在しないので、北庇つきの建物ともみなしがたい。

今回検出した互層地盤については、削平された古墳にともなう遺構とは考えられないだろうか。土層をみても、礎石建物の基礎としての地業のように、水平層の版築ではなく、土層が細かな単位に分れるとともに、水平ではなく傾斜をもった堆積を示す（図33）、古墳の墳丘盛土の状況に類似しているのである。

今年度、法華寺新町で別に2ヶ所の調査を実施した。第248-7次調査では、溝中に奈良時代初頭の土器がまとまって捨てられていたが、この状況は東方の木取山古墳の周濠埋立土に類似するとの指摘がある。また第248-8次調査でも地山の落ちが確認され、完掘しなかったが、古墳の周溝ではないかという所見を調査者はのべている。第118-4次調査の深さ70cmの掘り込み地業とされる遺構についても、断面図をみると、やはり版築風ではなく、それぞれ30cmほどの厚さをもつ大きな2層に分れるにすぎず、これを古墳の周溝埋立土とみることもできる。

コナベ古墳の東西および北辺には陪冢がめぐらっているが、南側にあたるこの地域には、現在のところそれは認められない。しかし、南側にもコナベ古墳の陪冢、あるいは木取山古墳などの中規模の前方後円墳などが他にも存在していたことは、当然考慮しておくべきことであろう（図34）。（岸本直文）

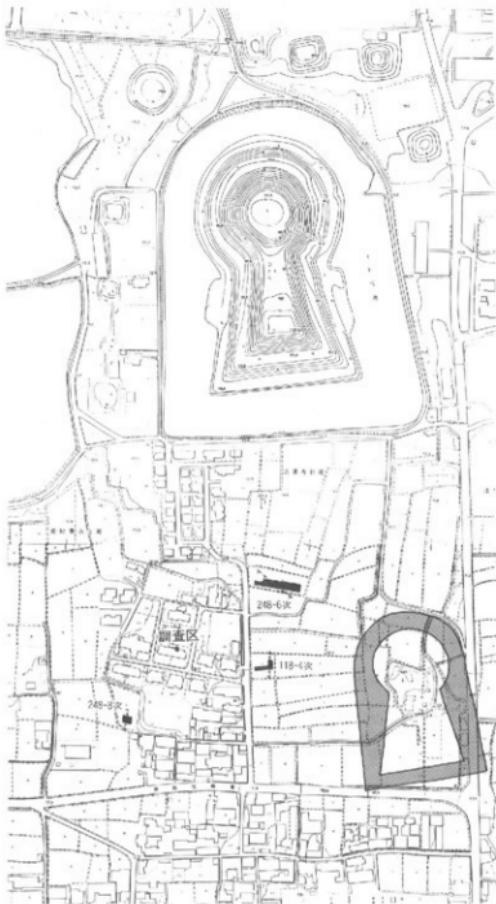


図34 コナベ古墳南方の調査 1:8000

住宅新築にともなう事前の発掘調査である。法華寺集落北方で、平城京左京一条二坊十六坪内にあたる。基本的層序は上から、近年の盛土、旧耕土、床土、炭混褐色土の整地層、明黄褐粘質土の地山である。東端では現地表面から深さ70cmで地山にいたり、遺構も地山に當まれているが、西に行くにつれ地表面が深くなり、炭や礫の混じった褐色土の整地が厚く堆積する。その中に大量の土器がふくまれていた。

発掘区中央は近年重機で攪乱されており、検出した主要遺構は東西溝SD6250 1条のみである。東西溝は幅3m以上、深さ1.2mで、さらに発掘区の北へひろがる。国土座標の東西に対し、東で15度南へ振れる。溝の埋土は大きく上下二層に分けられ、下層には炭が多量に混入した土層があって、土器が大量に出土した。

SD6250から出土した土器は平城宮II期に属し、壇場・漆付きの土器をふくんでいる。また、溝の埋土には炭が混入しており、近辺に工房のあった可能性が大きい。

発掘区西端の整地上から出土した土器は平城宮IV～V期に属し、二彩陶器2個体（3片）をふくむのが注目される。大型の盤と皿の破片で、この付近は一般の宅地とは異なる性格をもっていたものと考えられる。

出土した瓦は表4のとおりである。

東西溝SD6250は条坊と方位が一致せず、右図のように、現状の周辺の地割りも条坊に沿ったものではなく、東で南へ、北で東へ振れた不整形な地割りが続いており、すぐ北のコナベ古墳などと関連する溝ではないかと推定される。（山岸常人）



図35 調査位置図

表4 248-7次 出土瓦塊集計表

軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦		
形式種	点数	形式種	点数	重量
6133 Kb	1	6555重弧文	1	79.4kg
6291 A	4	6641 C	1	点数
6301 C	3	F	1	628
6311 F	1	6667 A	3	平瓦
		6671 C	3	
		6679 B	1	重量
		6681 B	2	155.8kg
		6685 B	1	点数
		6714 A	5	1,633
		6715 A	1	塊
				重量
				7.7kg
軒丸瓦計	9	軒平瓦計	19	点数
				16

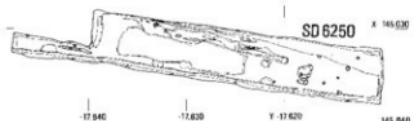


図36 第248-7次発掘調査遺構平面図 1:500

頭塔では今年度、北面第3～6段の解体修理を実施したが、それにともなう発掘調査はおこなっていない。以下には、解体修理で得られた主要な知見を報告しておく。

1) 北面第4段の基底石には、前面が平らで、おおむね幅50～60cm内外の石を選び、前面をまっすぐにそろえて、ていねいに施工していることがわかった。完全に地中に埋まっているか、上端が第3段テラス面からごくわずかに顔をだしているにすぎない基底石が、石積上部に比べてていねいに施工されていることは、工法上、注目に値する。北面第4段では、腐植土化していた基底部前面を全面的に排土した結果、このことがあきらかになった。これまでに実施した断ち割り調査でも、東面第3・5段および北面第3段では、基底石が地中に埋まるか、それにちかい状況を確認しており、同様の施工をおこなっているものとみられる。

2) 北面第5段中央付近に据えられている、表面に円形突起がある大型の石材の裏側に、円形の凹みがあることがわかった。この凹みは、表面の突起とほぼ同位置にあり、外径は水平方向430mm・鉛直方向420mm、内径は水平方向400mm・鉛直方向390mm、深さ30mmである。ちなみに表面の円形の突起は、外径が水平方向400mm・鉛直方向395mm、内径が水平方向・鉛直方向とも360mm、高さ20mmであり、裏面の凹みのほうがわずかに大きい。また、表面・裏面ともに、周縁部以外は繊で平滑に仕上げている。この石材は、従来から解釈が難しかったものである。ただ、目に触れることのない裏面のこうした仕上げから考えると、頭塔のために製作された材というよりも、他所からの転用材である可能性がたかくなつたといえよう。しかし、転用材だとしても、その本来の用途や、頭塔のこの位置に据えられた意味などは、いぜん不明である。

3) 遺物としては軒平瓦6732F（東大寺の瓦と同範）が2点出土した。このうち1点は第4段積土からのもの。なお、昨年度の第247次調査の概報では報告できなかつたが、北面第1・2段修理工事の過程で、表層土から大型の土馬1点が出土したことをつけ加えておく。

(小野健吉)



図37 北面第4段基底石

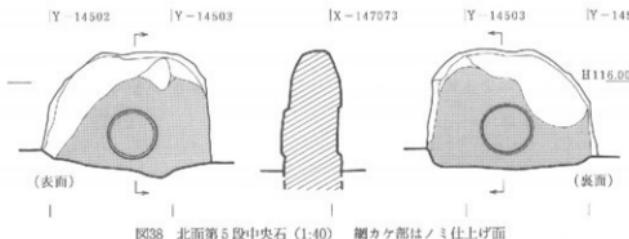


図38 北面第5段中央石 (1:40) 網カケ部はノミ仕上げ面



図39 同左・裏面

集合住宅建設にともなう事前調査である。平城宮西面大垣に接する地で、西一坊大路西側溝の検出を主目的として、敷地の西半に調査区を設定した。

1 層位

基本的な層位は、耕土（厚さ約20cm）、淡灰黑色砂質土、黄灰褐色粘質土（以上床土、厚さ約14cm）、灰褐色粘質土、黄褐色粘質土、茶褐色砂質土、灰褐色砂質土、灰白色粘土、暗灰褐色粘土、黒色粘土の順となる。黒色系の粘土の上に茶褐色砂質土を主体とする砂層がのる。主要な遺構はこの茶褐色砂質土を上で検出された。

2 遺構

主な遺構は掘立柱建物・礎石建物各1棟、溝5条である。

SB2525 東西両面庇付南北棟掘立柱建物。桁行4間分を検出した。柱間寸法は桁行で8尺、梁行で9尺であり、庇の出9尺とする。柱掘形は身舎で約1.4m四方、庇で約1.1m四方の方形を呈している。柱はすべて抜き取られていた。

SB2526 東西両面庇付南北棟礎石建物。掘立柱建物の南から4番目の柱掘形を、礎石据え付け掘形が切りこんでいた。掘形は方形で、一辺約1m。根石がのくる。今回は妻部分の3個の掘形を検出しただけだが、北壁にかかって次の掘形が一部確認された。今回の調査区の北約12mでおこなわれた平城宮第103-14次で、この建物の北延長部が検出されている。妻から5木目に相当する柱列がみつかっているのである。掘形からは奈良時代の瓦が出土した。時代の決め手となる遺物はないが、2棟とも奈良時代の建物と考えられる。

SD2527 古墳時代の素掘溝。幅約1.4m、深さ約0.4m。

SD2528 灰白色粗砂を埋土する素掘溝。他の遺構がのる茶褐色砂質土の上、黄褐色粘質土を切ることから年代は中世以降であろう。

SD2530 西一坊大路の西側溝。かろうじて長さ4mほどを検出した。これより北は削平をうけ、のこっていない。

SD2529・2531 浅い溝で、SD2527とほぼ直交する斜行溝であり、古墳時代の遺構である。

3 遺物

SD2527付近の包含層から軒丸瓦6308I型式1点が出土したが、瓦の出土量は少ない。土器では、SD2527から古墳時代の土師器がまとまって出土した。ただし、小破片が多く、器表の磨滅が著しいため、図示できる個体はない。

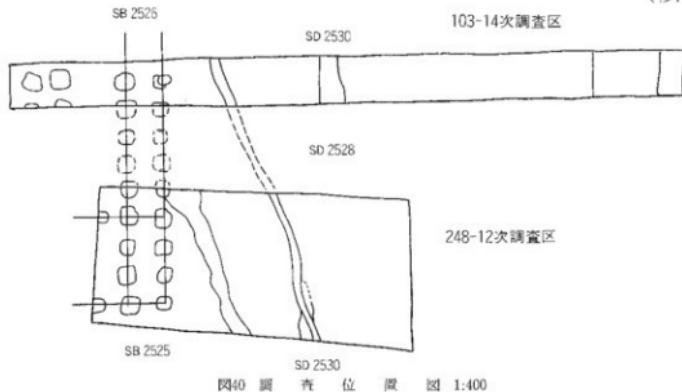
4まとめ

今回の調査で、西一坊大路西側溝から西へ12mほどのところに、東西両面庇付大形建物（南北棟）の存在することがあきらかになった。北の第103-14次調査では礎石据え付け掘形しか

検出していないが、掘形が一部重複するとともに、大きさが掘立柱建物の柱掘形に近似するところから、今回検出したように、掘立柱建物が礎石建物に建て替えられた可能性がある。このように考えると、掘立柱建物は、少なくとも北に7間以上のびることになり、北に3間分ずらせて礎石建物に建て替えられている。

従来、秋篠川による削平で、本調査区周辺での遺構検出例はほとんどなかった。今回の調査は、宮に接した西側の土地利用を考える上で、貴重な資料を提供したものといえる。

(杉山 洋)



集合住宅建設の事前調査である。調査地は右京一条二坊一坪の東辺部にあたり、西一坊大路西側溝の確認を目的として、南北12m×東西8mの調査区を設定した。

調査区の基本的な層位は、上から耕土、床土、黄灰褐色砂質土の遺物包含層となり、地表面下約50cmで黄灰色粘質土の遺構面に達する。検出した遺構は、南北溝2条、掘立柱建物1棟、掘立柱塀1条と、土坑2基である。SD921は西一坊大路西側溝で、幅約3m、深さ約0.5mを測る。堆積は上下2層に分かれ、下層の溝は断面がV字形に近く、一段深くなる。その西方では、築地の痕跡は検出できなかったが、掘立柱塀も存在しないので、一坪の東限をかぎる区画施設は築地であった可能性が大きい。SD2510は調査区西端の南北溝で、幅約1.1mで、深さが0.2m。調査区南端を西に拡張して、溝の西肩を確認した。築地の西雨落溝と思われる。SA2515はSD921の東肩にある掘立柱南北塀。柱間は8~13尺と不揃いで、方位も北でやや西にふれている。SD921の下層埋土より新しく、柱抜取穴から奈良時代末~平安時代初頭の上駒器が出士した。上層の溝に並存するものか。SB2511は南北塀で、桁行、梁間とともに3間以上。SA2515と同様、やや西にふれている。柱間寸法は桁行が9~12尺、梁間が4.5尺。時期は不明だが、築地の想定位置に重なるので、長岡京遷都以後の遺構とみるべきであろう。

なお、今回の調査で検出した西一坊大路西側溝SD921の溝心座標は、Y-19135.3となる。おもな出土遺物はSD921から軒平瓦6663C bと型式不明の軒平瓦が各1点、SD2510から奈良時代後半の上駒が1点、SD921の東肩の粘質土層から楔形石器または細石核となる石器が1点である。

(玉田芳美)

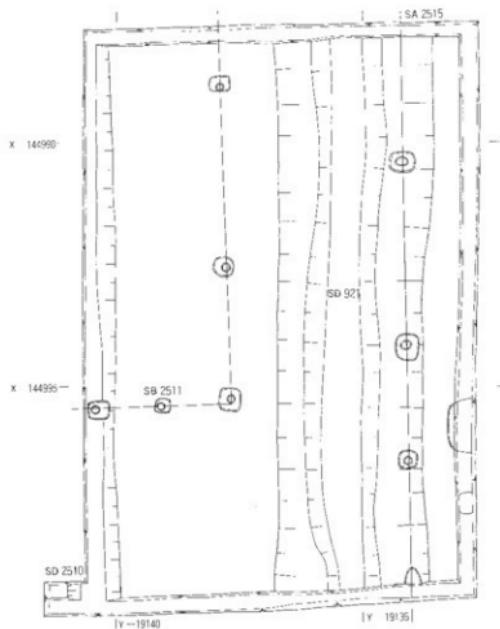


図42 第248-2次発掘調査遺構平面図 1:100

住宅改築にともなう事前調査である。調査地は若犬養門から二条大路を挟んで南西に位置し、坪の北端にあたる。南北約7.5m、東西約3mの調査区を設定し、平成6年11月7日から10日まで調査をおこなった。層序は宅地造成のため地表から約40～

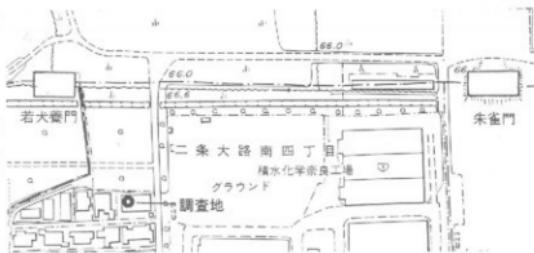


図43 第248-11次調査位置図 1:3000

50cmの深さまで盛り上がりが置かれ、その直下に地山の黄灰粘・砂質土が堆積する。擾乱のため、奈良時代の遺物包含層や整地上は部分的にのこるのみで、遺物も瓦が少量出土したにすぎない。

遺構は最近の土坑数基のほか、時期不明の置石SX2520、斜行溝SD2521を検出した。SX2520は長径60cm以上の石を、ほぼ同じ規模の浅い土坑に据えたものである。SD2521は調査区の南西隅で北端を検出し、最終日に調査区を一部南へ拡張して性格を確認した。その結果、SD2521は北西から南東にのびる溝であることが判明した。埋土中に弥生時代後期の土器片が大量に堆積しており、今回の調査部分のみで整理箱11箱分が出土した。弥生式土器は周溝に投棄されたものと思われ、このことからSD2521はこの時期の方形周溝墓の一部と考えられる。

(白井 熊)

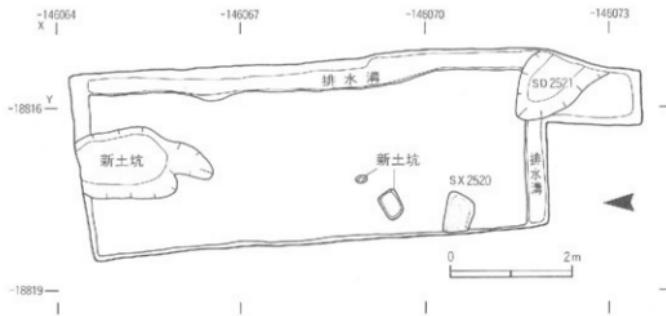


図44 第248-11次調査遺構平面図 1:80

住宅改築にともなう事前調査である。調査地は平城宮西面中門と北門との間の大垣に西接する位置にあたり、西一坊大路が想定された。周辺におけるこれまでの調査では、南の第103-14次調査で大垣の東西両側溝を、北の第118-29次調査で西側溝を検出しており、これらとの関係が問題となる。発掘区は両側溝確認のため2ヶ所に設けた。東区は3×7m、西区は4.5×12mの各東西トレンチで、面積の合計は75m²である。

基本的な層序は、上から盛土、耕土、床土、暗黄褐土をへて遺構面にいたる。現地表面下0.7~1.0mである。

西区では、トレンチの大半が建て替え前の建物の基礎で破壊され、西一坊大路の路面上で土坑1基を確認したのみであるが、トレンチ西端で西側溝とみられる南北溝を検出した。溝幅は70cm、深さは検出面から20cmしかのこっていない。一方、東区には溝幅5.6m、深さ0.5mの南北溝があり、これを東側溝と判断した。溝の堆積土は4層に区分できるが、掘り下げた範囲では遺物をほとんどふくんでいない。

両側溝の座標を、これまでのものとあわせて示すと下のとおりである。

	次 数	X座標	Y座標		次 数	X座標	Y座標
東側溝心	248-14	-145271.0	-19109.9	西側溝心	118-29	-145121.0	-19132.2
	103-14	-145392.0	-19107.9		248-14	-145275.0	-19132.5
					103-14	-145392.0	-19132.2

今回の発掘区における西一坊大路の幅は、溝心々間で22.6m、路面幅は20.5mを測る。西側溝の心は從来の成果とはほぼ一致し、南北方向の方位にのるが、東側溝の心はやや西に寄る。これは同溝が北でやや西へ溝幅をひろげていることを示している。なお、今後の周辺の成果とあわせて検討すべきであろう。

(寺崎保広)

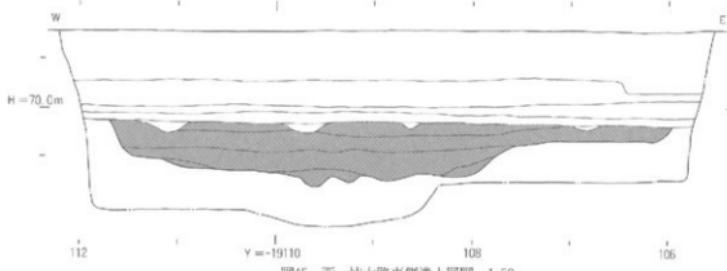


図45 西一坊大路東側溝土層図 1:50



写真1 第246次調査区全景（東から）

撮影 佃 幹雄



写真2 第246次調査 方形周溝墓SX16360（南から）

撮影 牛嶋 茂



写真3 第253次調査 東一坊大路西側溝（南から）

撮影 佃 幸雄



写真4 第254次調査 七条条間北小路南側溝内祭祀土坑（北東から）

撮影 牛嶋 茂

表5 その他の発掘調査一覧

次 数	遺 跡 名	概 要
248-9	馬寮推定地	共同溝埋設にともない、幅2m×長さ22mを調査。馬寮西限の掘立柱塚SA3680の柱掘形1個および東西塚1条を検出。
248-10	東院東端	個人住宅建設にともない、3m×3mを調査。小形掘立柱建物の柱掘形を4個検出。
248-3	平城宮北方（平城陵）	平城駿後内郭東北部。旧耕土下0.6-1.1mで埴山に達する。埴山面まで近現代の侵乱がひろがり、古墳盛土ものこらない。埴輪も出土せず。
248-4	右京三条一坊（西一坊坊間路）	顯著な遺構なし
248-8	左京一条二坊十坪	調査区西半で埴山が急に落ち込み、整地土で埋めもどされる。埴輪などの遺物は出土しなかったが、古墳の周濠を埋めたものか。
248-16	西大寺旧境内	遺構：土坑9、柱穴1、ヒット2、東西溝（奈良時代？）、近世の井戸。 遺物：瓦コレクション20箱、土器1箱。

1994年度

平城宮跡発掘調査部発掘調査概報

奈良国立文化財研究所

1995年6月

PRELIMINARY REPORT of EXCAVATIONS in NARA PALACE SITE

APR. 1994 - MAR. 1995

DIVISION of
the HEIJO PALACE SITE INVESTIGATIONS

● NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE ●

2-9-1, Nijo-cho, Nara-city, JAPAN 〒630

TEL. 0742-34-3931